二人のヒーローが死神の世界に現れました

桜咲

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

何万人も救った一つの力を持つヒーロー
自分を悪党と名乗る最強の力を持つヒーロー
二人のヒーローと死神達が交わる時
物語は始まる――――――

説明が下手な所があるのでご了承下さい
このクロス中々なくね？という訳で書いちゃいました

テヘッ（

目次

ABLATION OF HERO
ヒーロー、消失する ―― 1
ヒーロー、旅禍になる ―― 10
ヒーロー、絶対絶命 ―― 21
ヒーロー、知る ―― 31
ヒーロー、巻き込まれる ―― 44
ヒーロー、刺される ―― 54
ヒーロー、激怒 ―― 61
ヒーロー、死神にお世話になる 74
DEATH A HERO LIVES
ヒーロー、挨拶する ―― 85
ヒーロー、挨拶するin一番隊＋新コーナー ―― 93
ヒーロー、挨拶するin二番隊 101
ヒーロー、挨拶するin三番隊 106
ヒーロー、挨拶するin四番隊 113
ヒーロー、挨拶するin五番隊 118
ヒーロー、挨拶するin六番隊 127

ヒーロー、挨拶するｉｎ七番隊＆九番隊 ―――― 136
ヒーロー、挨拶するｉｎ十番隊 142
ヒーロー、挨拶するｉｎ十一番隊 149
ヒーロー、挨拶するｉｎ十二番隊 159
ヒーロー、挨拶するｉｎ十三番隊 164
ＢＯＵＮＤ　Ａ　ＨＥＲＯ
エネミー、動くものと待つもの 171
ヒーロー、雷神と会う ―――― 177
ヒーロー、雷神を知る ―――― 182

ＡＢＬＡＴＩＯＮ　ＯＦ　ＨＥＲＯ
ヒーロー、消失する

一方通行は、小さな体を、離さぬように抱きしめた
今の一方通行は血だらけ
そして、抱かれているのは体力を消耗した打ち止めだった
「…よかった」
ポツリと、一方通行は呟く
「チクショウ…本当に…よかった…ッ‼?」
小さな体を力強く抱きしめる
「感動の再会の所で悪いけどさ」
だが、番外個体の言葉で、現状を理解した
「このクソッタレの戦争は、このままハッピーエンドで終わってくれる感じじゃなさそうよ」
一方通行は嫌な感じを覚え、天空を見上げる
そこには、巨大な要塞が浮かんでいた

あの要塞がなんなのかは知らない
あの矛先が、どんな効果をもっているのかも理解出来ないだけど
「…発射されれば、まともな結果にはなりそォにねェな」
一方通行は感じていた
あの矛先は、誰一人とも残さず、世界を破壊できると
一方通行も、番外個体も、打ち止めも、一人残さず
「…ふざけやがって」
吐き出すように呟いた
直後だった
ドシュッ!!?と、一方通行の背中からドス黒い翼が噴き出した
彼の怒りの象徴
この翼を出せば、一方通行は自我を失っていた
だが
「…番外個体」
一方通行は自我を失っていなかった
静かに、一方通行の言葉が響く

「俺はあれを止めてくる。このガキを任せられるか？」
　番外個体は聞きたいことを聞く
「ロシア側から？それとも学園都市側から？」
「全てからだ」
　無茶苦茶な注文に、番外個体は息を吐いた
　だが番外個体は逆に悪意に満ちた顔をした
　楽しむように
　鉄釘をジャラジャラと鳴らす
　と、懐にいた打ち止めが、一方通行の袖を掴んだ
「何処へ行くの？ってミサカはミサカは質問してみたり」
　打ち止めは一方通行が行う事を全て理解している
　理解している上で、一方通行を止めようとしている
「何処へも行かないよね？ってミサカはミサカは確認を取ってみる」
「心配いらねェよ。直ぐに終わらせる」
　帰るとも、戻ってくるとも言わない一方通行
　だがこれで良いのだ
　一方通行はそう思った

打ち止めの指を、一本一本外していく
黒い翼は、バキバキ‼?と音を立て、そこから出てきたのは
純白の翼だった
「嫌だよ」
打ち止めがか細い声で呟く
「ずっと一緒にいたいよってミサカはミサカはお願いしてみる」
「…そうだなァ」
一方通行も、認めた
いままでの一方通行では、絶対しなかった
だが、今は自然に
子供のように、無邪気な笑顔を見せた
「俺も、ずっと一緒に居たかった」
一方通行は、打ち止めの肩を軽く押す
それだけで、一方通行の体は浮いた
打ち止めの腕が、一方通行に伸びる
だが、それは届く事はなかった

一方通行は、彼女らに背を向け、要塞に向かった
その直後
要塞から黄金の塊が投下した
それを一方通行は、怯えず、ただ前をみる
反射も効かない、得体の知れない塊
だがそれがどうした
一方通行はスピードを上げる
あの塊とぶつかる為に
（そォか）
一方通行は今更ながら思った
――これが何かを守る為の戦いなのか――
直後
上空ハ〇〇〇メートルで、二つの巨大な力が激突した
その直後
一方通行は、この世界から消失した――

バキバキバキッ‼?と、大地を揺らす
『ベツレヘムの星』が崩壊する音だった
ガラガラと、ベツレヘムの星は崩れていく
その落下速度が増す中で
上条当麻は全力で走っていた
北極海の沿岸、海面と陸地の狭間
そこで無理やりに大型上昇用霊装を破壊し、降下軌道を捻じ曲げた上条は、『大天使』に立ち向かう為、ただひたすら走り続ける
そして、何か凄まじいものが、高速で接近している
バキバキバキッと、白い大地を抉るように接近する
抉るように動く大天使
同時、『ベツレヘムの星』は真上から落下した
轟音を立て、大天使ごと巨大な要塞が重力に逆らい、落下した
だが上条は、速さを遅めず、ただひたすら下へ下へと走る

光もない、ただ暗闇
その中で、一つの静かな光が灯った
上条はそこに全力で向かう
あそこにいるのは大天使
右拳を握りしめる
莫大な殺意が溢れ出すなか、上条は最後まで足を止めず、あの光に向かっていた
ここに来るまで、色々な事があった
そもそもの始まりは記憶を失った所からのスタートだった
とある一人の少女を悲しませないように嘘をつく事から前へ進む事にした
特別な『血』を持つ少女を助けるために錬金術師と戦った
第三位の超能力者や彼女の妹達を助けるために、最強の怪物とも戦った
海の家ではクラスメイトの裏切り者と死闘を繰り広げた
八月三十一日には色々な事があった
ＡＩＭ拡散力場の集合体たる『ともだち』を助けるために本物のゴーレムに立ち向かった
『法の書』を解読できるという触れ込みのシスターを助けるために十字教最大宗派にケンカを売った

常盤台中学の少女の後輩と関わった事もあった
大覇星祭では運営委員やクラスメイトが巻き込まれる事態になりながらも『使徒十字』の脅威から学園都市を守った
イタリアのキオッジアではかつて敵だった少女を助けるために氷の艦隊に突撃した
九月三十日には変わり果てた『ともだち』を助けるため、『神の右席』の女と激突した
クラスの皆と食べたすき焼きは美味しかったし、常盤台中学の少女の母親を助けるためにスキルアウトともぶつかった
フランスのアビニョンではC文書を巡って『神の右席』と戦った
学園都市の地下街では天草式十字凄教と一緒に強大な『聖人』と戦った
イギリスのロンドンでは第二王女が主導するクーデターを食い止めた
そして今
長かった、と思う
ここまで来る間の出来事は、決して楽しい事ばかりではなかった
何度も何度も他人を傷つけ、他人に傷つけられ、そんな事を繰り返してきた
だけど
上条当麻はまだ走れる
それらの行動が、決して少なくない人達を助けて来れたのだという事を知っているか

ら

最大の敵、大天使に向かって、真っ直ぐに向かって突き進む事が出来る

（確かに、この世界はいつか滅んでしまうかも知れない。惑星にだって寿命はあるし、その前に膨らんだ恒星に飲み込まれるって事も分かっている。そんな風になる前に、地球の表面から生き物がいなくなってしまう確率の方が高いかも知れない）

でも、と上条は思う

こんな悲劇の結末じゃなくていいじゃないか

そいつを食い止める為に、戦っていいはずだ

二つの影が、最短距離で激突した

十月三十日

上条当麻

彼は二度目の『死』を迎える事となる

そして

上条当麻は三度目の『生』を

一方通行は二度目の『生』を

迎える事となる――――――

ヒーロー、旅禍になる

ここは何処だ？
上条がまず思ったのはそれだった
自分は大天使とぶつかった。それは分かる
だがその後どうなった？
空から落ちている感じがする
（……ん？）
そこまで考えて上条は思った
（……〝空から落ちている？〟）
上条の思考が止まった
どんどん青ざめ、上条は恐る恐る首だけを下に落とす
そこは空だった
そしてその下は地面だった
数々の家が並ぶ
だが今の上条はそんな事考えられなかった

「うわァァああああああああああああああ‼?‥」
上条は叫んだ
両手両足をバタバタさせながら
「うおうおうぉお‼?‥うわァァああああああ‼?‥あああああああああああ‼?‥」
途中、何かにぶつかったような気がするが、勿論上条はそんな事考えている暇がなかった
ドォン‼?‥と、上条は地面と激突した
いてて…と、上条は痛む体を抑えながら上半身を起こす
もはや人間をやめている
上条はキョロキョロと、辺りを見渡す
だが左右は壁、前方後方は道がよく見えない
上条は立って進む事にした
そうしなければここの事がよく分からないからだ
上条は歩いた
同時、何者かがここ――精霊邸に進入した
それは、上条当麻と、あの男――一方通行も含まれていた――
一方通行はズルズルと引きずるように歩いていた

何故こんな状態なのか、それは、一方通行は魔術を使い体の内側はボロボロ。さらに世界を破壊出来る黄金の塊に激突し、外側、内側がボロボロになっている
それなのに生きているのが不思議なくらいだ
ポタポタと血が滴り落ちる
今の一方通行は能力すらほぼまともに使えない
バッテリーの残量は後僅か
だから保存する為杖を突いているが、壁に体を預けて進んでいる状態だ
「ハァ…ハァ…」
荒い呼吸が繰り返される
角を曲がろうとした時だった
ドンと、誰かにぶつかった
一方通行はそれだけで倒れた
一方通行は上半身を起き上がらせた
そしてぶつかった相手を見た
そいつは
「ア、一方通行⁉？」
上条当麻だった

上条は今凄く混乱していた
何故こんな所に一方通行がいるのだ？
それだけで混乱していた
だが、一方通行の体を見たら目を見開いた
「おい一方通行‼？何だよその傷‼？」
上条は一方通行の側に行く
「ハァ…うる…せェ……こンな…」
「大丈夫じゃないだろ‼？待ってろ、今医者を…」
そこまで考えてまた上条は考える
ここは自分が来たこともない世界
そこに一方通行を置いて一人で行ったらどうなる
迷子ａｎｄｄｅａｔｈ
そして上条が出した結論は
「よし、一緒に行くぞ」
一方通行を腕を、自分の首に回し背負う
「‼？おい…一人で歩け――――――」
「いいから大人しくしとけ」

この世界を考える場合じゃない
まずは一方通行を助けなければ
だが上条も相当なダメージを負っている
当然
「‼?いっ…」
全身に痛みがくる
「…やっぱり自分で」
「いいから‼?俺よりお前の方が酷いんだからな‼?」
上条は一方通行を背負いながら進んだ
「……ここ、何処なんだろうな」
「天国ならいいンだけどなァ…」
「…天国じゃねぇのか?」
上条はどうやら天国と思っていたらしい
だが一方通行はそうおもっていない
一方通行は常識を上条にぶつける
「天国ってのは、楽になるンだろ?だが俺たちはあの状態のままここにいる。ここが天国だったとしても俺は認めねェ。逆にその神ってやらをぶっ殺してやる」

後半説明になってなかったようだが、上条はある程度理解した
そうだ、ここが天国ならこんな傷だらけではないはずだ
ここが天国なら、自分も認めないとこう。逆にそんな事言ったやつは殴ろう。と上条と一方通行は珍しく心の中で合意した
どれくらい進んだのだろう
気づけば何か大きい塔?を見つけた
「ハァ……取り敢えず…彼処に…行くか」
と言っても、上条の体力はもうそこそこない
一方通行も血を流しすぎたのか、力が出なかった
上条が一歩を踏み出した
時だった
「お前達が進入者か」
上条と一方通行の背後から、声が聞こえた
二人は振り返る
そこには
白い羽織を着た、銀髪の少年だった
だが何故か背中に刀を持っている

「……進入者？」
上条は進入者という言葉に疑問を思った
それを聞き返したと思ったのか、銀髪少年が言った
「そうだ。旅禍と言った方が正しいか？ここ精霊邸に無断で入った旅禍野郎」
精霊邸？旅禍？
二人には訳が分からなかった
ここは天国なのかは疑問に思っていた
だがここまで来ると、益々ここがどこだかわからなくなる
銀髪少年はハァ…と溜息をし
「じゃあ……捉えさせてもらうぜ‼？」
刀を抜いた
それに一方通行は身の危険を感じ、僅かにしかないチョーカー型のスイッチを押す
これで一方通行は、第一位の能力を使う事が出来る
「右手で触るンじゃねェぞ‼？」
一方通行は上条の襟首を持ち、一気に飛び上がる
「‼？‼？」
それに銀髪少年は目を見開く

「逃がすか…!!?松本!!?」
銀髪少年は名前を呼んだ
すると、ヒュンと誰かが来た
「はい!!?隊長!!?」
そいつは、オレンジ髪に色気をさす爆乳女性だった
「旅禍が二人逃走!!?追うぞ!!?」
「はい!!?」
銀髪少年と爆乳女性は一瞬で消えていった
「ハァ…ハァ…」
一方通行はある程度進んだ所で電源を切り、屋根に座り込んだ
「だ、大丈夫か?」
上条が一方通行の隣に座る
「ハァ…うる…せェ…」
一方通行は大丈夫ではなかった
もう残量は残っていない
もしまた襲われたら、一方通行の電量は確実になくなるであろう
そうしたらもう絶対絶命だ

相手は刃物を使う
もし一付きされたら、今の二人では即死だ
「ハァ…くそっ…あの塔に…行けば…」
上条は塔を見る
だが
「行かせねぇよ」
二人の頭上から、あの銀髪少年の声が聞こえた
そう、文字通りあの銀髪少年
と、爆乳女性だった
「どんな効果を使ったのか知らねぇが、どうやらテメェらには手を抜く必要は無さそうだ」
銀髪少年は刀を抜く
そして
「霜天に坐せ、氷輪丸‼?」
銀髪少年の刀が変わった
バキバキと、何かが纏うようになる
「さぁ、今度は逃がさねぇぜ?」

銀髪少年は二人に斬りかかる

だがそれは間違いだった
このまま銀髪少年が、何も唱えず斬りかかれば勝機はあった
だが
銀髪少年が唱えた事で、それは大幅に〝無くなりつつあった〟
それは
「‼?」
上条が右手を翳す事で
右手と刀がぶつかった時
パキィィン‼?と、何かが砕けるような音がしたからだ
「‼?なっ…⁉?」
これには銀髪少年も、爆乳女性も驚きを隠せなかった
刀が、力が一瞬消された
それで一瞬、二人から目を逸らしてしまったのだ
それを逃さなかったのが一方通行

一方通行は瞬時に電源を入れ、上条を担いであの二人から遠ざかった
そして担いだまま、あの塔に向かったのであった

ヒーロー、絶対絶命

一方通行は上条を担いであの塔に来ていた
だが、正確にはその塔に差し掛かる前の入り口だが
一方通行はそこで降り、スイッチを切り替えた
「ッハァ…ハァ…」
「ハァ…ここ…まで…来れば…」
上条は前を見る
そこには、何十段もある階段があった
「……登るか」
「ハァ…チッ…」
上条は一方通行を担ぎ、階段を登り始めた
「ハァ…ハァ…」
「……おい…三下ァ」
「ハァ…な…んだ…？」
「…お前…もう限界なンだろォ…」

「ッ…」
先程も記したが、上条はほぼ限界を越えていた
半分差し掛かった所で、一方通行は上条に話しかけたのだ
「…限界…だよ…だけどな…ここの事を知る為には…この先に行かなくちゃ…」
「……」
「それに…お前、歩けないんだろ…？」
「ッ……」
そう、上条の言う通り、一方通行も限界を越えていた
あの世界の傷に、能力を多数使用している
まだバッテリーはあるが、数十秒しかない
「……チッ」
「ハハハ…でも…意外だな…」
「ア？」
上条は階段を登りながら呟いた
一方通行には聞かれたが
「いや…一方通行って…変わったんだな～…と」
「……」

「ロシアで会った時…突然でびっくりしたけど……あの子を助けたい思いで俺にぶつけたんだな」
「……」
「いや～…上条さんは驚きましたよ～…列車止まったと思って外に出たらお前がいたからな～……」
「……すまなかったな」
「……もう驚かんぞ」
そう駄弁って？いながらなのか、階段がもう少しで終わりそうだった
「やっと…終わりか…」
上条と一方通行が最後の一段を踏み込んだ
その時だった
ゾワリ‼？と、何かを感じた二人
その二人の前方の建物から
ゴシャアアアン‼？と、破壊された
そこから出てきたのは
大柄で眼短をした男と
オレンジ髪に身の丈ほどにある刀を持った男が、刀と刀をぶつかりあっていた

そしてその二人は、真っ直ぐに上条達に向かってくる
「!!?ヤベェ!!?」
上条は一方通行を引っ張り、転がった
二人の男は階段の寸の所で止まった
「……三下ァ…ここは危険のようだぜ」
「くそっ…こっちは限界だってのに…!!?」
上条と一方通行はあの二人から離れようとする
だが、体が言う事を聞かない
今までの疲労が、ここにきたのだ
「ッ…!!?」
どうやらあの二人は気づいていないらしい
一方通行はスイッチを切り替えようとする
だがそれより速く
あの大柄が放った黄色いなにかが二人に襲いかかった
「!!?一方通行!!?」
上条は一方通行の元へ行く
そして一方通行の前に出て、右手を翳す

パキィィン‼?と音を立て、黄色い何かは砕けた
そしてこれはどういう悪運か
いや、上条なら不幸というか
上条が何かを砕く所を
「なっ…」
「…へぇ…」
オレンジ髪の男と、大柄の男が見てしまったのだ
「…あ…」
上条は汗が出る
「お前…今何しやがった?」
大柄の男がこちらに近づく
本気でヤバい
ただでさえこっちは傷だらけなのに
（…バッテリーは後十四秒）
一方通行は見計らっていた
今の二人は戦えない
逃げる事を先決にする

「おい‼?お前の相手は俺だ‼?」
オレンジ髪の男が、大柄の男の注意を引こうとする
が、大柄の男は止まらない
「俺はまず聞きたいんだよ…あれはなんだってなぁ」
上条は後ずさりする
まだだ…と一方通行は見計らう
大柄の男が上条の目の前に来た時だった

(ここだ‼?)
一方通行は瞬時にスイッチを切り替えた
上条を担ぎ、あの二人の横を通る
「あ?」
「なっ‼?」
大柄の男は疑問を
オレンジ髪の男は驚きを隠せなかった
いける、と一方通行は確信した
このままあの二人から遠ざかる事が出来る

だが
現実は甘くない
「ハッハァ!!?なんだそりぁ!!?面白えじゃねぇか!!?」
あの大柄の男が、楽しむような口調で一方通行の速さに負けぬ速さで襲ってきた
「!!?」
一方通行は驚きを隠せなかった
それは、大柄の男が目の前にやってきたからだ
「オラァ!!?」
大柄の男が刀を振り上げる
それを、一方通行はまともに食らった
それだけで、一方通行と上条は数メートルも吹っ飛んだ
「ガァァァあああああああ!!?」
「ぐわァァあああああああああ!!?」
二人は壁に激突し、地面に横たわった
「!!?!!?おいお前ら!!?」
オレンジ髪の男が寄ってくる
それと同時に

ピー‼?と、一方通行のチョーカーから発した音
（⁉?時間切れ…⁉?）
一方通行は完全に動けなくなった

「お、おい‼?なんだ今の⁉?」
オレンジ髪の男――黒崎一護は訳が分からなかった
ただ分かる事は、白い男がピクピクと指を動かしているだけだった
「ッ…ア、一方…通行」
どうやら一方通行というらしい
一護はツンツン頭の少年に問いた
「お、おい‼?こいつはどうなったんだ⁉?」
「し、知らねえ…よ…」
どうやらツンツン頭の少年もわからないそうだ
それに、まだ分からない事がある
何故この二人はこんなにもボロボロなのだ?
あの男――更木剣八の攻撃を受けても、こうはならない
いや、まともに食らったあの一方通行という男はあり得る

だがツンツン頭は、それ以上にボロボロだった
「お、おいお前ら…何でそんな――――」
「んだぁ？くたばっちまったのか？」
一護達の背後で、あの剣八の声がした
それは、楽しみが無くなったような声だった
「まぁいいぜ…さぁ、続きと行こうぜぇ!!？」
剣八は一護に刀を振るう
「!!？ぐぅ!!？」
それを一護は食い止める
（兎に角!!？ここから離れねぇと!!？）
一護は向きを変え、走る
「ハッハァ!!？逃がさねぇ!!？」
それを剣八は追う
それで、二人から剣八を遠ざけた
（くそ…意識…が…）
上条は意識を失いそうだった
あのオレンジ髪の男が大柄の男を遠ざけた為、危険は免れた

速くここから離れて治療しなければ
一方通行を見る
一方通行の体からドクドクと血が出ている
右肩から斜めに斬られた
それにあの世界でのダメージが加わる
もはや一方通行は瀕死同然
だからここから離れて血を止めなければならない
だが、体が動かなかった
（は、やく…治、療）
等々上条は意識を失った
失う直前に
こちらに来る二人の男は、味方と思いたい、と上条は思いながら意識を失った

ヒーロー、知る

「いっ…」
上条は痛みによって目が覚めた
だがさっきの痛みと比べるとあまり痛くなかった
上条は起き上がる
今自分がいるところは、地下みたいな所だった
そして自分の体を見ると、包帯がまかれていた
「……誰が…」
上条は横を見る
そこには一方通行が寝かされていた
だがこちらも包帯が巻かれていた
「!?·一方通行!!?·」
上条は一方通行の側に行く
スゥ…と、安定した寝息を立てている
それを聞いて上条は安心した

どうやら一方通行は大丈夫そうだ
上条は立ち上がり、周りを探索しようとした
そんな時だった
ドンと誰かにぶつかった
「あ、わりぃ…」
上条は顔を見ると、ひ弱そうな少年が青ざめた顔で上条を見つめていた
「……えーと」
「わぁぁ!!?ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!?」
上条は早速混乱した
え、俺何かやった!?という顔でアワアワとしていた
「ちょちょちょ!!?そんなに謝らなくても!!?」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!?」
だが止まらず、ついに土下座をかました
「〜〜〜〜〜〜だーーー!!?だから大丈夫だって!!?」
上条はつい大声で叫んだ

すると少年は止まり、改めて上条の顔を見る
そして上条も少年の顔を見る
ジーと見つめ合い、やがて
「おはようございます」
「あ、おはようございます……って何で⁉?」
落ち着いたのであった
「いやー目を覚まして良かったですよ‼?もう傷が酷かったんですから～」
「そ、そうか…」
「だよなー。特にあの白い奴は酷かったぜ‼?もう死んでもいいじゃないか位に‼?」
何か一人混じっているが
「……ってお前誰だよ‼?」
「んだぁ⁉?命の恩人に向かってそれは⁉?」
「ちょちょっと～岩鷲さーん～‼?」
どうやらまだ落ち着いてないそうだ
「おいお前…あ‼?お前目が覚めたのか‼?」
途中来たあのオレンジ髪に助けられた
「えーコホン、では改めて、俺は黒崎一護だ」

オレンジ髪の男が黒崎一護
「俺は志波岩鷲だ!!?」
途中混じったのが志波岩鷲
「僕は山田花太郎です」
ひ弱そうな少年が山田花太郎
この三人が上条と一方通行の命を救った者達だ
「あ、…俺は上条当麻だ。ありがとな」
上条は礼を言うのを忘れ、今言った
「いえ、良いんですよ〜。ちょっと苦労しましたけど…」
「苦労したのかしたんだな」
「男二人を運ぶのは別に大した事はねぇ。だが一番大変だったのは治療だったんだよ」
上条は?を浮かべた
そんなに酷かったのか?と
花太郎はポリポリと頬をかき
「はい……あの白い方は酷い怪我だったので治療するのに少し手間取って…そして上条さんは何かに妨害されてるみたいに治療が出来なかったんです」
ここまで言われて上条は理解した

恐らく花太郎は何らかの力を使って上条達を治療していたのだろう
一方通行は大丈夫だが、上条は困難だった
それは
「だから兎に角血を止めなきゃって事に夢中で…」
「あー…俺心当たりあるわ」
え⁉？と、三人の言葉が合わさった
「多分花太郎は、何か異能の力を使おうとしてたんだろ？」
「異能の力…？霊力の事でしょうか…」
「んーそれだな。俺の右手には〝幻想殺し〈イマジンブレイカー〉〟っていう力があるんだ」
「幻想殺し…？」
一護が聞き返した
「あぁ、この力は、異能の力を消す事が出来る」
「はぁ⁉？」
そして一護が驚いた
「じ、じゃあ‼？あいつの力が消えたのも‼？」
「あいつって…あの恐い奴か？そうだよ。それも俺の力だ」

一護と他二人はポカーンとした
「さ、最強じゃねぇかよ」
岩鷲がポツリと零した
「いや、違うよ」
それを上条が即座に否定した
「え、何でだよ。その力があれば…」
「あくまで範囲は〝右手〟だけだ。それ以外は普通の人間だよ」
それに、と上条は付け加えた
「この力は、神の保護さえも消し去る」
「か、神⁉?」
また三人の言葉が被った
「それで、上条さんは不幸体質になってしまったのですよ」
はぁ…と溜息する上条
「…大変だったんだな」
「…大変だったんですよ」
一護に励まされる
逆に惨めになると、上条は思った

「…さて」
上条はふぅと息を吐いた
そして三人を見る
「次は俺たちの番だ。ここは何処なんだ？それで、あいつらは誰なんだ？」
真剣な表情で三人を見る
その反応に

三人は目を丸くした
「……え？」
「え？」
何故か真剣になった自分が恥ずかしくなってきたと上条は思った
「ソ、尺魂界を知らないでここに来たんですか⁉？」
「知らね」

そして教えてもらった
尺魂界の事を

死神の事を

「　　以上です」

「　　天国？」

天国という言葉に上条はワナワナし

そして立ち上がり

「ふぶっ⁉？」

花太郎を殴った

「⁉？」

それに驚く一護と岩鷲

「え⁉？いきなり何を　　」

「うるせぇ‼？ここが天国⁉？俺は認めねぇぞ‼？俺はまだ死んでねぇ‼？」

「お前が死んでないから追われてるんじゃないのか⁉？」

「じゃあ何で岩鷲は追われてるんだよ‼？」

「俺は無断で入ったからだよ‼？それとこいつらの協力ぅ‼？」

「俺らも無断で入ったわぁ‼？」

ギャーギャー‼？と騒ぐ四人

そんな時に

「うるせェな……」
「‼？一方通行⁉？」
一方通行が目覚めた
ポリポリと髪をかいている
「お、お前大丈夫なのか⁉？」
「お前に心配される義理はねェ」
「何で⁉？」
一方通行は眠たい目で三人を見つめ
「誰だ？」
と言った
そしてまた自己紹介
「…一方通行」
「一方通行？本名なのか？」
「……本名は忘れた」
「……悪りぃ」
何故か暗くなってしまった
ちなみにこの世界は説明しました

「で？オレンジと馬鹿とガキは何の目的で行動してるんだ？」
「オレンジ⁉？何で⁉？」
「馬鹿って何だよ‼？」
「うるせェな。俺がどう呼んでも勝手だろォ…」
　まだ眠たいのか、眠そうな顔で三人を見つめる
「……仲間を助けに来たんだ」
「仲間？」
　上条の顔が険しくなる
「あぁ、捉えられている。そいつが、処刑されちまうんだ…」
「処刑⁉？」
　上条が驚く
　一方通行の顔が険しくなる
「な、なら早く行かねぇと…‼？」
「…そうだ、ゆっくりはしてられねぇ」
「じゃあ何でそんな…‼？」
「処刑されるのは今日じゃねぇんだ。でも、やっぱり行かなきゃ…」
　一護は立ち上がった

「お前らはどうする。ここにいるか？」
　岩鷲と花太郎も立ち上がり、一護が二人に聞く
「……いや、もう少しここにいたら移動するよ」
「け、怪我が酷いんですよ～？安静にした方が…」
「いや、三下の言う通りだァ」
　一方通行が遮るように言った
「俺たちは、この世界に関しちゃあまだ無知だ。だからもっとこの世界を知らなきゃならねェ」
「……そういう事だ」
　一護と花太郎は心配そうな顔をしたが
「……分かった。俺たちは先に行くぜ」
「この道を真っ直ぐ通れば出口があるので、お気をつけて」
　そして三人は去っていった

「……さて、体を休め…？」
　上条は一方通行がおかしい事に気付いた
　ずっとチョーカーを弄っている

「一方通行、どうしたんだ？」
上条は一方通行に聞いたが
「……いや、何でもねェ」
何でもないと返された

（……回復されている…？何故だ。あの時確かに…）
一方通行は考えていた
あの時、確かに切れたバッテリー
だが、それが〝回復している〟
（……一分…か。充分だ）
たったの一分
だが一方通行にとっては充分だった
何故回復しているのか分からないが、今はそんな事を考えている時ではないと判断した
（……）
一方通行は、これから何が起こるか分からないので、温存する事に決めた
そう、備えて――――

「……ん？一方通行？」
上条が一方通行の方を見ると、スゥ…と、寝息が聞こえた
すると、一方通行が寝ている事が分かった
「……じゃ、俺も寝るかな」
上条も仮眠を取る事にした
二人が寝ている間に、外が大変な事になっているなど、二人は知る由もなかった

ヒーロー、巻き込まれる

「……」
一方通行は何かを感じて目を覚ました
上半身を起こしたが、ボーッとしている
隣を見ると、スゥ…スゥ…と上条が寝ていた
「……いつの間にか寝ちまったのかァ」
今何時なのだろうか、と気になる一方通行
だが一方通行は知らない
寝込んでたのが三日という事に
一方通行は自分の体の状態を調べる
痛みは勿論ある
だが疲労はある程度回復されており、歩けるのは問題ないであろう
バッテリーもさっき（ではないが）から減っていない
「……天国……か」
一方通行はこの世界について、少し考えていた

（……ここは尺魂界、即ち天国。そして死神。虚。……これしか言われなかったな）
せめてあいつらの事も教えてほしかったと、一方通行は思った
ちなみにあいつらとは更木や日番谷冬獅郎の事である
（ここが天国なら、俺と三下は死んだ事になる…だが、死んだ奴は必ず流魂街って所に行く…なら、俺と三下はまだ生きている可能性はある）
決して一方通行が死んだと諦めた訳ではない
まだ可能性はある。一方通行はそう確信した
と、丁度
「……う…」
上条が目を覚ました
「……？あれ、一方通行？」
「起きたか」
上条はふわぁ…と欠伸し、辺りを見渡す
「ここは…そうか、俺寝ちゃったんだ」
「歩けそうならもう行くぞ」
一方通行は杖をつき、出口に向かう
「……ってちょっと待てよ‼？」

それを上条は後を追う

ゴトンと音がした
ゴトゴトと、マンホールみたいなのが揺れている
ガタンと、マンホールの蓋が少しだけ開いた
そこから顔を覗かせるのは
「……異常なしっ‼?」
上条だった
上条はマンホールの蓋を全開に開け、よじ登った
「……よし、一方通行‼?」
「……チッ」
上条は一方通行の手を取り、一方通行を引っ張り上げる
「よっ‼?……お前軽いな」
「うるせェ黙れ」
上条に毒吐きながら歩き出す一方通行
向かう先はあの大男にやられた所まで
「あ、待てよ‼?置いてくなよ‼?」

上条がまた後を追おうとした
その時
ブワァァ‼?と、炎が舞い上がった
それは、一方通行と上条…ではなく
その先にある丘から出たものだった
「なっ……⁉?」
上条は驚いた
対して一方通行は直ぐに顔を強張り、警戒した
「……ここからは慎重に行くぞ」
「ッああ」
上条と一方通行は警戒しながら階段を上っていった
階段を登り切り、ある程度済んだところ
「……あれ、なんだったんだろうな」
あれとは、炎の事である
あの炎は数分続いていたが、突如消えてしまった
その時は警戒をしていたが、何もなかったので上条は薄れていたが一方通行は警戒を怠らなかった

「……さぁな。何か始まったのか…それとも」
「……それとも？」
一方通行が少し間を空けたが
「……いや、何でもねェ」
上条は転けそうになった
「あいてっ‼？」
いや、転けた
「……」
「そ、そんな哀れむような目で見ないで‼？上条さん惨めになるから‼？」
ドンマイと言いそうな目を上条に向けている一方通行
いや、実際の彼なら絶対言わないが
「くそ～……よっ」
上条は立ち上がり、砂を払った
「……」
「無言で歩き出すなぁ‼？」
上条に何も言わずスタスタと歩き出す一方通行
それを上条は突っ込みながら進むのであった

その直後
ブワァッ‼?と、あの丘から桜の花弁が何枚も舞っていた
「おぉ…」
上条は少し感動するが
「　　、」
一方通行はまた警戒を強めた
それは、その花弁が黒い何かによって散らばったからだ
「え⁉?」
上条は今度は驚いた
一方通行は警戒を強めながら、尚且つ冷静に
「　　どうやら、あそこでは何かが起こっているようだなァ」
と、上条に聞こえるように言った
上条は顔を強張め
「あぁ」
と返した
「……いい案がある」
「え」

一方通行がニタリと笑った
こんな一方通行の考えている事は嫌な予感しかしないと上条は純粋に思った
その通り
「おい三下ァ……舌噛むなよ」
一方通行の手はチョーカーに伸びており
カチッと音がした
何故かさっき（ではないが‼?）も受け続けていたのに何故か汗が出る上条
一方通行は上条の襟首を持ち
ダァン‼?と、飛び上がった
「どわァあああ‼?」
上条が叫んでいるが御構い無し
バッテリーが少ないので、スピードを上げる
そして目的地の丘を見る
何か黒い何かで覆われている
一方通行はニタリと笑い、さらにスピードを上げる
「うおっぶっちょっ一方っ通行‼?もっゆっ‼?」
もはや上条の言葉を聞いていない

ちなみに上条は「うおっ‼?ちょっ一方通行‼?もうちょっとゆっくり‼?」と言いたかったのだろう
屋根に屋根に飛び移る
途中上条が何か当たっているような気がするが、一方通行はそんな心配はしない
そしてあっという間に丘に着いたのだった
ダァン‼?と、砂埃が舞い、足が着地した所で上条を見る
「……何でンなボロボロなんだァ?」
「お前の所為だよ‼?‼?」
一方通行は知らんと言いそうな顔で上条を見る
「あんなスピードでいかなくてもいいだろ⁉?」
「うるせェ」
「もうちょっとスピード下げろよ‼?」
「うるせェ」
「何で俺うるせェで返されてるの⁉?」
「殺す」
「何で⁉?」
そろそろ一方通行がキレそうなので口を閉ざしとく上条

と、上条がある人を見つけた
それは、いかにも幽霊が着そうな白い浴衣に身を包んだ少女だった
「……えーと」
「き、貴様らは誰だ…?」
「アア?」
一方通行が睨みを利かす
別に睨まなくても良いだろ…と上条は思っていた
「そういうお前も誰だ」
質問を質問で返す一方通行
「え…あ…く…」
「く?」
上条と一方通行が聞き返す
「……朽木……ルキアだ…」
「朽木か、俺は――――――――」
少女――――ルキアの名前を聞いた途端
ブオオ‼?と、上条の前を桜の花弁が横切った
「うえっ…⁉?」

上条は数歩下がる
一方通行はチョーカーに手を伸ばしながら、桜の花弁を飛ばした相手を見る
その相手は、黒い長髪に整った顔立ちをした男
「…貴様ら、ルキアを助けに来た者ではないな――――？」
――――朽木百哉が刀を向けていた

ヒーロー、刺される

「貴様ら…ルキアを助けに来た者ではないな」
上条と一方通行は戦闘態勢を取っていた
理由は、相手――――朽木白哉が敵意を剥き出しで睨んでいるからである
だが白哉の言い分も最もである
上条と一方通行はルキアを助けに来たのではない
知らぬ間にここにおり、何かあると思ってここに来たのだから
「……それがどうしたァ」
一方通行は聞き返した
白哉はさらに睨みを効かせ
「……なら、排除させてもらう」
刀を上条達に向けた
「散れ、千本桜」
数枚もの花弁が上条と一方通行を襲う
「⁉？くっ‼？」

上条は右手を翳し、それを防いだ
「……ッ‼?」
一方通行はいつの間にか電源を入れ、反射した
「‼?ほう…」
白哉は少し驚いたが、直ぐに冷静になり
「行け」
桜の花弁に命じた
「くそっ‼?」
上条は右手で防ぐが、数が数で上条に少し受けてしまう
「……なるほど」
だが一方通行は違った
桜の花弁を反射で除けながら、一気に白哉の懐に飛ぶ
(‼?⁉?速い…⁉?)
「どうやら」
一方通行は右手を白哉に向ける
殺人の手を
「幾ら強力でもスキはあるンだなァ」

白哉は一方通行の右手に、ゾワリ!!?と何かを感じた
あれに当たっては駄目だ
あれに当たっては

〝死ぬ〟
白哉は瞬歩を使い、一方通行と距離を取る
「!!?チッ…」
一方通行は舌打ちし、白哉を睨む
「……!!?」
白哉が千本桜に命じようとした
その時だった
「止めろ!!?」
第三者から声がかけられた
お互いに動きを止める
一方通行と白哉の間には
一護が立っていた
「終わりだ!!?一方通行はルキアに危害を加えねぇ。だから止めろ!!?」

白哉は暫く睨んでいたが、やがて刀を仕舞い
「……」
睨みながら去っていった
「いやー…助かったよ黒崎」
「…いや、俺は…」
「チッ」
一方通行が不機嫌そうに舌打ちした
もしや、強者とやりたかったのか？
一方通行は電源を切り、丘の先まで行った
「……ここが、尺魂界」
尺魂界を見渡す一方通行
ここの丘――――双極の丘の先で、そよそよと風が一方通行に当たる
暫く一方通行は眺めていた
「一方通行」
一方通行が振り返ると、上条がいた
「……あ？あのオレンジは」
「黒崎なら花太郎に治療中」

あそこと上条が指差した所に、正確には少し離れた所に一護が治療されているのが分かった
いや、もっと正確に言えば階段だが
「……何で階段で」
「さぁ」
ハハッと笑う上条
一方通行はハァ…と溜息をした
「で、何してたんだ？」
「……眺めていた。この世界を」
上条も前を見る
少し壊されているが、ここから見れば綺麗なものだった
「……へぇ…」
「……」
一方通行は密かに思い出していた
『ずっと一緒にいたいよってミサカはミサカはお願いしてみる』
あの少女の事を
「……なぁ三下」

一方通行は不意に上条に聞いてしまった
「ん？」
「俺たちは死んでないよなァ？」
「あったり前だろ‼？」
上条はニカッと笑った
ずっと気になっていた
上条と一方通行は死んだのかを
だが死んでいないと、一方通行は心そこから安心した
絶対戻ってやると決意した

その時だった
「残念やなぁ、君らはここで死ぬのになぁ」
ズザッ‼？と、一方通行の体が何かに襲われた
一方通行は何が起こったのか分からなかった

ゆっくりと、自分の下を見る

一方通行は混乱した
何故刀の刃先が見える
何故
自分の体は血で濡れている？
理解した時は遅かった
ズボッと刀が抜かれる
一方通行は力無く倒れた
上条は目を見開いた
ドクドクと、血が何滴も下に滴り落ちる
一方通行は死人のように動かない
「……ぁ……ぁ…」

「一方通行ァァあああああああああああああああああ!!?」

ヒーロー、激怒

「一方通行アァあああああああああああああ!!?」
上条の叫びが響く
血だまりの中でピクリとも動かない一方通行
恐らく急所が当たったのか、それとも――
上条は最悪な結末を想像してしまった
このままでは――
「ん？後は君だけぇ？」
上条の背後から声がした
上条はゆっくりと後ろを見る
そこには、狐のような目をした男が立っていた
「いやぁ楽で良かったわぁ。なんやら君ら変な力使う聞いて警戒しとったけど…楽に出来て良かったわぁ」
その言葉に上条の奥底から煮え滾る何かが流れ込んできた
ギュと、右拳を力強く握る

「……ぉ……ぇ…」
「ん？」

「お前がァァあああああああああああああああああ!!？」
黒崎一護は驚愕していた
叫びが聞こえ、丘に戻ってみると、一方通行が血だらけで倒れていたのだ
「一方通行!?？」
一護は痛む体に鞭を入れ、一方通行の元へ行った
抱き上げると、ヒュー、ヒューとか細い息をしている
（まだ生きてる…!!？）
一護はそう確信し、井上織姫の元へ向かう
その間に、一護はチラリと横を見る
そこには、怒りに身を任せた上条と、それをニヤけるようにかわす市丸ギンの姿があった
（――――――――一方通行は任せろ!!？）
一護はそう心に言い、井上の元へ向かう
が

「困るなぁ。その子を治すのは」
一護の背後から声がした
一護が振り返る前に
ズバァ‼?と、斬られた
「……ぁ……」
一護は倒れこむ
一方通行は転がるように倒れこむ
「‼?あ…何故…⁉?」
遠くにいたルキアと花太郎が驚きの顔に包まれていた
「朽木さん‼?彼が何者かしっているのか⁉?」
石田雨竜がルキアに聞いた
「あの人は…護天十三隊第五番隊隊長…藍染惣右介隊長だ…‼?」
一護を斬ったものは
不敵な笑みをした藍染惣右介だった
「うわァァあああああああああああああああ‼?」
上条は冷静ではなかった

怒りに身を任せて殴る
だがそれはかわされている
「ん～…怒りに任せてもなんもないで?……って聞いてへんか」
上条が今何も聞いてない事に気づいた市丸ギン
「ん～……しゃあない」
ギンは小刀を構え

「射殺せ、神槍」
突如
ズバァ!!?と刀が伸び
それは上条の横腹に向かっていく
そして、上条はそれをまともに受けた
「ガッ……ゴホッ!!?」
上条は踏ん張る
フー!!?フー!!?と荒い息をしながら
「あー……言い忘れてたけど」
ギンは刀を戻し、こう言った

「寝とった方がええで。〝死ぬから〟」
直後
上条の体が膝から崩れ落ちた
「ぁ……ガァ…!?」
ピクピクと震える指
脇腹に右手を当てるが、何もない
つまりこれは異能の力ではない
「……ッぐ…」
「おー怖い怖い。そんな睨まんで欲しいなぁ」
ギンは完全に仕舞った所で藍染の方を向く
「藍染隊長ぉ。これでよろしいんですかぁ？」
「ああ。よくやったよギン。後は……〝崩玉〟のみ」
藍染惣右介は進んでいく
正確には、ルキアの元へ
「ギン、彼らを頼む」
「はいはい」
ギンは上条に近づき、抱き上げる

もはや上条は意識を失いかけていた
だから抵抗も出来ない
藍染はルキアの前に出る井上織姫、石田雨竜、そして茶渡安虎を退けた
いや、正確には第六番隊隊長、東仙要からの攻撃だった
「ガッ!!?」「キャア!!?」「うっ!!?」
花太郎はビクビクして何も出来ない
ルキアはズルズルと後方に下がる
「な……あ……」
「大丈夫だ。痛くはない」
藍染はルキアの首を持ち上げた
「う……!!?ガァ…!!?」
ルキアが抵抗する
だが何も出来ない
「……ッ!!?」
藍染が何かをしようとした

その時

ギィン‼?と、藍染の体が吹っ飛ばされた
「⁉?」
これには藍染も驚いた
ルキアはドサッと尻餅をつき、助けてくれた顔を見る
その相手とは

「ハァ…‼?ハァ…‼?」
先程まで瀕死だった一方通行だった
一方通行は斬られた所を抑えている
藍染は笑みを崩さず、尚且つ怒り口調でギンに尋ねた
「ギン、これはどういう事だ?」
「おかしいですね〜。急所は当てた筈なんやけどなぁ」
ギンは予想外のような顔をしたような気がした
「ハァ…‼?ハァ…‼?くっ…ハァ…ハァ…‼?」
倒れそうな体を踏ん張る一方通行
恐らく瀕死の状態まで行っているのに、何故倒れないか
それは、彼の能力について注目してほしい

彼の能力は〝ベクトル変換〟
あらゆるベクトル（向き）を自由自在に操る能力
この力があれば、血流操作や体のベクトルを操る事が出来る
一方通行はそれを利用したのだ
ドクドクと流れている血を、血流操作で操り、何とか血を止めている状態だ
だがこれはあくまで応急処置
集中が途切れば血が再度流れ出す
だから一方通行は決めた
残り少ないバッテリー
それが無くなる前に
（…終わらせるッ‼？）
一方通行はベクトルを操り、まずはギンに近づいた
「⁉？」
ギンは僅かに反応が遅れた
そしてギン……ではなく上条を掴む
「なっ⁉？」
ギンの力が緩み、上条の体は難なく引き剥がされた

一方通行は仕方がないという顔で上条を投げた
正確にはルキアの元へ
「⁉？くっ‼？」
ルキアに直撃してしまったが、一方通行はそれどころではない
ベクトルを操り、藍染を狙う
「ッ‼？」
藍染は刀を構え、防御体制に入った
ドンドン‼？と、一方通行の攻撃は防がれる
「チッ‼？」
一方通行は高く飛び上がり、上から狙う
ドゴォン‼？と音を立て、砂埃が舞った
（…どうだ…？）
一方通行は大体ダメージは与えたであろうと確信した
だが
「やれやれ、服が汚れてしまった」
藍染は傷一つなく、ただ服が汚れただけだった
「な、なン…だとォ…？」

「ん？もう終わりかい？なら…」
スゥと、一方通行の背後にはいつの間にか藍染が回り込んでいた
「お返しと行こうか」
ズドォン‼？と音を立て、また砂埃が舞った
砂埃が去った後は、クォーターが出来ており
その中心には、傷だらけの一方通行が倒れ込んでいた
そして同時に
ピーッ‼？と、一方通行の電極から鳴ったものだった
それはバッテリー切れを表すもの
つまり、一方通行は能力がもう使えなくなった
（……あァ……終わりかァ……）
一方通行は静かに思うのだった
「……ふむ、彼も中々だ」
「どうします？」
「彼も、連れて行こうか。」
そして藍染はまたルキアに近づいた
「ぁ……来るな…ッ‼？」

ルキアは今上条を抱いている
藍染は上条の方をチラリと見て、ルキアの首を掴んだ
「さて、崩玉を取り出そうとしよう」
そして藍染はその手を

ズザリと、ルキアの向き胸に突き刺した
「あ……ガァ⁉?」
ルキアは呻き、藍染が手を抜いた所でルキアは倒れ込んだ
そして藍染の手には、一つの玉が握られていた
「これが崩玉……ッ‼?」
藍染はそれを暫し眺め、懐に仕舞った
「ギン、彼らを」
「了解」
ギンは上条と一方通行を連れて行こうとした

その時

「動くな」
藍染の首元に、一つの刃先が伸びていた
それは、四楓院夜一からだった
そしてその隣では、砕蜂が刀を向けていた
さらにその先では、ギンは松本乱菊に捕まれていた
東仙は狛村に捕まれていた
そして周りは、護天十三隊がいつの間にかいた
「一歩でも動いたらこの刃がお前の首を切り裂く」
夜一は刃先を藍染の首に近づける
「……少し」
藍染は静かに言う

「遅かったな」
直後
黄色い柱が藍染とギンと東仙を囲んだ
「⁉?」
夜一と砕蜂、乱菊と狛村は一斉に離れる

藍染達の体は浮き上がる。天へと
その天の先は
「……⁉？メノスグランデ⁉？」
メノスグランデが大量にいた
うじゃうじゃと気持ち悪い程にいるメノスグランデ
「……彼らを手に入れれなかったのは惜しかったが、まぁいい」
藍染は眼鏡を捨てた
「私は、私の世界を作る」

「私は天に立つ」
藍染はそう言い、藍染、ギン、東仙はメノスグランデと共に消え去った

そして、落ち着いた護天十三隊はまず治療を開始した
特に酷い上条と一方通行の治療を最優先にしながら――――

ヒーロー、死神にお世話になる

「……ッぐ…」
一方通行はゆっくりと目を開けた
だがそこは知らない所で、一方通行はベッドに寝ているという実感を持った
（……俺は……生きてる……？）
一方通行は生きてるという実感が湧かなかった
あれだけ大量に血を流して生きているだなんてと思う
（……化け物……か）
一方通行は素直にそう思った
（……？）
一方通行は何か違和感に襲われた
何か…違う
そんな時だった
「起きましたか？」
一方通行に声がかけられた

正確には扉の方からだった
一方通行は首だけ向けると、そこには優しそうな雰囲気を放つ女性がいた
「……誰だテメェ……」
「卯ノ花烈です。あなた方を治療した」
「……あなた方？」
「ええ、正確には私と副隊長の勇音が…ですが」
なら三下は無事かァと一方通行は心の中でそう言った
「調子の方はどうですか？」
「……大丈夫…だァ」
「無理はなさらない方がいいですよ。今回特に酷かったのはあなたなんですから」
「……」
一方通行は口を閉ざしてしまった
卯ノ花はフゥ…と溜息を吐き
「そうそう、あなたの元の怪我も治しておきましたよ」
「……元？」
一方通行はそれに再度違和感を覚えた
元

元から…

古い…傷

「⁉?」

一方通行は違和感の正体が分かったと確信した

この違和感の正体は、何故自分はバッテリーが切れているのにこんなにも平常でいるのか

いや、ただ充電すればいいのかも知れない。だがこの世界の人々がそれをやると思うか?

答えは否、このチョーカーを見たら真っ先にハテナを浮かべるであろう

だからおかしかった

そう、一方通行の脳は

完全に復活していた

「⁉?おい女ァ⁉?これはどういう事だ⁉?」

一方通行は荒げた

あの冥土返し〈ヘブンキャンセラー〉も治せなかったのを、最も簡単に治してしまった

「何で俺の脳が治ってやがる‼?答えろ‼?」

卯ノ花はフフッと笑い

「少し手こずりましたが……詫びとして、ですよ」

「そんな事を聞いてるンじゃねェ。どうやって治したかだァ‼?」

「それは企業秘密です」

ニコッと笑う卯ノ花

対して一方通行はギリリ…と歯切りした

だがこれは一方通行にとっては良いのか悪いのかが分からない

とりあえず一方通行は立ってみた

「　　、」

杖なしでも立てる

電源はオンになっていない。つまり治っている

一方通行はそれを再確認した所で、歩き出した

「何処に行くのですか?」

「……」

「あまり無理はなさらないように」
無言の一方通行に、卯ノ花はただ注意した
そして一方通行は病室から出たのであった

「それにしてもあの機械……凄い機械でしたね…涅隊長が食いつきそうですね」

「……うーん」
上条は何故か唸った
理由は、いつも病院送りなのに何か違うと思っていた
それはそうだ。ここは上条達（ではないかもしれないが）にとっては異世界
てか天国に病院ってあるのかよと本気で思った上条
「……これからどうなんのかな～……」

と、そんな上条に
ガチャリと、扉が開いた
「……上条当麻だな」

そこには、あの朽木白哉がいた
「……うぇ？」
上条は何か分からなかった
「……ついてこい」
白哉はそういい病室から出た
「……いやついてこいって…おいいいいいいいい⁉？」
上条はそう叫ぶしかなかった

「ハァ……ハァ……おい…ちょ」
「何だ」
「何だじゃねぇよ⁉？いきなりついてこいって説明しろ⁉？」
「総隊長がお前達をお呼びになったからだ」
「総隊長？」
もう上条は疲れたという顔でついていくのであった
「ここだ」
白哉が止まった先は

でっかく一と書かれた巨大な扉だった
（……で、デケェ……）
と上条は素直にそう思うんだった
「……丁度あちらも来たようだな」
白哉が向ける視線に、上条も向けると
「お待たせしました」
卯ノ花烈と
「……」
一方通行が立っていた
「あ、一方通行～」
「……」
「何で無言⁉？」
無言の一方通行に少しシュンとなる上条
白哉と卯ノ花は静かに、尚且つ疑問を持って考えていた
（あの上条という男……この霊圧を分かっているのか…？）
（恐らく一方通行という方は分かっているはず……ですが何故汗一滴も見せないのでしょう……逆に敵意を剥き出しにしているような…）

そう考えていると
「おい、さっさと開けろ」
一方通行が少し苛つく調子で言った
「お、そうだった‼？総隊長に会わせてくれるんだっけ？」
少しズレているが上条は扉に向き直った
「……開けるぞ」
白哉は扉を開ける
そこにいたのは、白い羽織をきた男女と老人だった
その中に、上条と一方通行が戦った相手もいる
「総隊長、二人を連れてきました」
「うむ、戻れい」
白哉と卯ノ花は定位置につく
ピリピリとした空気に、上条はさすがに顔を引きつられた
そんな中で、一方通行が口を開く
「で？総隊長さんが俺達になンのようだァ？」
その言葉に、一人の女が
「な、何だその口の聞き方は‼？」

と、怒った
「黙れ、俺は今総隊長っつうジジィに話しかけてるンだ」
「ジ、ジジィ…!?」
ギリリ…と歯切りする女
「やめい」
それを、総隊長が止める
それで女は悔しそうに一方通行を睨むが、引き下がった
「上条当麻に、一方通行だったな?」
「あ、ああ」
「あァ」
総隊長はジッと二人の顔を見て
「お主ら二人は、儂等護天十三隊の監視下に置かれる事となった」
「……ハッ、そんな事だろォと思ったぜ」
一方通行はそれを予想していたかのように鼻で笑った
「……監視下……」
上条は少し焦っているが
「お主ら二人は、危険人物としここ、尺魂界にそのままいる事になる」

「……ここは天国っつう所だろ。なら現世っつう所じゃ駄目なのか？」
「儂等もそれは考えた」
　だが…と総隊長は一間開け
「どうやら主らは藍染に狙われているらしい」
「……」
「じゃから、現世よりもここ尺魂界の方が守りを固めれると思い、尺魂界に決定したのじゃ」
「……監視下に置かれて尚且つ守るだァ？随分ズレた事を言うンだなァ」
　一方通行が笑う
　それに上条は少し焦る
「え、えーと、つ、つまり…俺達はここに置かれて監視下されて守られる…という事か？」
「……まぁ大体はそうじゃな」
　すると上条は総隊長に向き直り
「なら、これからよろしく……お願いします…」
　お辞儀した
「……チッ」
　それに一方通行は舌打ちする

総隊長は少し驚いていたが

「……うむ」

返事した

ここから、ヒーローと死神達の生活が始まる

DEATH　A　HERO　LIVES

ヒーロー、挨拶する

「……何でこォなったンだ」
「まぁ良いじゃん」
上条と一方通行の前には
高級住宅地にありそうな一軒家があった
時は数時間前に遡る

「で、提案した儂等が何じゃが、お主ら住む所はどうする？」
「は？」
一方通行からは？という言葉が出た
「他の隊長の所へ移行…かの？」
「なら俺の所に来いよぉ‼？得に白髪‼？」

総隊長の言葉にまず反応したのはあの更木剣八だった
「いえ、二人はまだ治療の身なのでここは四番隊が…」
そして次に反応したのは卯ノ花烈だった
「いや、ここは私だネ。こいつらは研究のしがいがありそうダ」
そしてその次に反応したのは涅マユリだった
「ここは僕ちんじゃないのかい～？」
「僕の所なら、歓迎するよ」
京楽春水、浮竹十四郎が次に手を挙げる
「私の所に来てもいいぞ」
狛村左陣も乱入する
「……どっちでもいい」
日番谷冬獅郎は別に来てもいいという顔で収めた。早く終わらせたいのか
「……」
朽木白哉は無言
「私は……私は……」
砕蜂は何故か口ごもった
「……めんどくせェ」

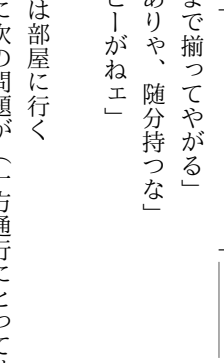
「…ハハ……ハ……」
もはや上条は笑うしかなかった

と、今まで無言だった白哉が
「だったら、こいつら専用の家を建てればいいのではないか?」
という意見に、二人の意見も聞かず皆は渋々納得し
そして白夜の権力で

冒頭に戻る
「……いやぁ…まさかこうなるとは…」
これから二人が住む所は、何故か本当に何故か十番隊に近い
何故十番隊が近いのだろうと本気で思った一方通行だった
そして家建つの早くね?と上条は純粋にそう思った
それもこれも白夜と総隊長の権力である（多分）
因みに何故このデザインかと言うと、二人に合わせて作られたらしい（多分）
「ま、入ろうぜ」
上条は楽しみに扉を開け、その中に入る

「……チッ」
　それに一方通行も続く
「……」
「おい、どうした」
　上条は口を開いたままポカーンとしていた
　例えるならこうであろう↓（ 。 д 。）
　一方通行は得に何のリアクションもせずズカズカと入る
「ア、一方通行はこの家を見て何も感じないと…？」
「ア？別に普通だろォが」
「第一位の感覚狂ってるぞ‼？」
「オーケー」
「待って何で戦闘態勢⁉？」
　玄関でアワアワする上条
　一方通行は戸惑いもなくリビングに入る
「ほォ…死神っっうのは現世のデザインでも知ってたのか？」
「じゃね？」
　兎に角探検する二人

因みに一階建てである
その分何故か横幅が広い（家が）
例えるならこうだ←



「……食材まで揃ってやがる」
「こんだけありゃ、随分持つな」
「何故コーヒーがねェ」
「知るか」
そして次は部屋に行く
だがそれに次の問題が（一方通行にとっては多分）

「……こんなに広いのに何故普通の部屋が一つしかねェンだ」
「……本当だ」
そう、あんなに家は広いのに何故か普通の部屋が一つしかない
リビング、風呂、キッチン、書斎、ゲストルーム（何故かある）、トレーニングルームはあるのに何故か普通の部屋が一つしかない。因みにトイレもある
それならトレーニングルームやゲストルームなんていらないんじゃないか？と一方

通行はまた本気で思った
　だが上条はそんなの気にしてないようで
「しゃあねぇ、一緒の部屋で寝るか」
「はァ⁉？」
　それに一方通行が反論する
「テメェ馬鹿何ですかァ⁉？」
「え？別に問題ないだろ？」
「お前分かってんのか？俺が過去何したって事を」
「……」
「そんな悪人と一緒の部屋とか、しかも殴りあった。それでもか？」
「もう良いじゃねえか、そんな昔の話」
　上条は一方通行の言い分には乗らなかった
「確かにお前のした事は許されねぇよ。でもな、お前は変わったじゃねぇか。ロシアの時だってお前はあの子を助ける為に俺に怒りをぶつけた。だから今更そんな事で愚痴愚痴言ってちゃ何も変われねぇよ」
「……」
「ん？もしかして俺と同じ部屋嫌？」

「嫌」
「即答ひでぇ⁉?」
　さっきのシリアスは何処に行ったのか
「ま、まぁ、これは決まった事だから⁉?」
「……チッ」
　上条は無理やり終わらせた
　一方通行は舌打ちした

　そして二人はリビングに戻ってった

「さて、一方通行。俺たちにはやる事があります」
「……あ?」
　一方通行はとりあえず耳を傾ける
「お世話になる護廷十三隊さんに挨拶を」
「行ってこい」
「お前も行くんだよ⁉?」
　上条は即座に突っ込む

一方通行はめんどくせェという顔で寝ようとする
「さぁ行くぞ‼?」
だがそれは上条に妨害され、不機嫌のまま上条に掴まれたまま家を出るのだった
「さて…何処から行こうか…」
「……」
明らかにめんどくせェという顔で歩く一方通行
「十番隊が近い……でも一から行ったほうがいいな……よし、まずは総隊長さんからだ‼?」
「……あのジジィはいいだろォ…」
「ちゃんとした名前も聞いてないからいいだろ?」
「……もォ勝手にしやがれ」
一方通行は観念したので上条の後を付いていくことにした
「さぁ行くぞ‼?」

ヒーロー、挨拶するｉｎ一番隊＋新コーナー

「……おい」
「ん？」
「……迷ってねェよな？」
「……」
ダラダラと汗を流す上条
一方通行はハァ…と溜息を吐き
「不幸だァ…」
と呟いた
見ての通り二人は絶賛迷子中である
一方通行は上条に付いて行っただけなので悪くない（本人がそう思っている）
上条は頭を抱え
「あ、あれ～……一番隊ってこっちじゃなかったっけ？」
と悩ませるのであった

そんな二人に
「ん？おーい、二人共～」
救いの神？が降りる
「ん？……えーと」
「あ、自己紹介してなかったね～。僕は京楽春水。よろしく～」
「あ、上条当麻です」
「……一方通行」
とりあえず自己紹介を済ます三人
上条は京楽に
「京楽さん。俺たち一番隊に行きたいんですけど…」
と、道を尋ねた
「ん？一番隊に何の用だい？」
「いや、これからお世話になるので挨拶にと…」
「あらあら～偉いねぇ～。それなら一番隊ならこっちだよ」
京楽が歩き出す
それに続く上条と一方通行
「僕一番隊隊長だからね。それなら許すよ～」

「ありが……一番隊隊長⁉?」
上条がお礼を言おうとした時の京楽のカミングアウト
一方通行は驚いていたが別の意味で驚いていた
（……あんなダラダラしたやつがそんな地位に立っていいのか?）
上条は
（てっきり総隊長さんが一番隊隊長かと思ってた…ん?総隊長だから全隊の隊長?……んな馬鹿な）
上条は苦笑いする
「ん?どうしたんだい?二人とも難しそうな顔して」
「いえ、何でもありません」「ねェ」
二人息ぴったりと否定する

「ここだよ～」
京楽が止まる
二人は見上げる
「……へぇ…さっきとは違う」
「あそこは違うからね～」

そして中へ入る三人

「隊長」
京楽が中を案内してると、一人の女性が京楽に声を掛けた
「あ、七緒ちゃ～ん。この二人が」
「隊長、あなたまた仕事ほっぽりだしましたね？何回ほっぽり出せば気が済むんですか？」
「…え…と…」
京楽の言葉を遮るように七緒という女性は迫る迫る言葉で迫る
二人は付いてきていないみたいだ
「……ん？あなた達は？」
と、七緒が二人の存在に気づいた
「こ、この二人は上条当麻くんと一方通行くんだよ～。わざわざ全隊に挨拶にいくんだよ～」
「そうですか。伊勢七緒です。一番隊副隊長を務めています」
「あ、上条当麻です…」
「……一方通行」

そしてまた自己紹介する三人
と、京楽が何かを思い出した
「そ、そういえば‼?.山爺から茶会の誘いがあったんだ‼?.良かったら上条くんと一方通行くんもおいでよー」
「隊長‼?.あなたには仕事が」
「それじゃあね～」
七緒の言葉から逃げるように上条と一方通行を連れて離れる京楽
「た、隊長オォおおおおおおお‼?.」
怒号の叫びが一番隊に響き渡った
「ふぅ…ここまで来ればいいかな～?.」
「……」
もう何も言えない上条と一方通行
今二人はこう考えているだろう
（一番隊大丈夫なのか…!?.?.）

と

「さて、山爺の所に行こうか～」

「え、あれって逃げる為の口実じゃ…」

「いや本当だよ？茶会は嘘だけどね～」

もうどうなっているんだと本気で思い始めた上条

一方通行はもう考えないようにした

「山爺～上条くんと一方通行くん連れて来たよ～」

ギィと扉が開く

そこにいたのは、茶を飲む山本元柳斎の姿だった

「うむ、こちらに来なさい」

上条は少しタジタジになりながらも山本の前に行く

一方通行は特に迷いもせず前に行く

「さて、儂は山本元柳斎。総隊長を務めておる」

「か、上条当麻です…」

「……一方通行」

一方通行は少し警戒を見せている

上条はこの空気に耐えられないのか。少し汗を流している

「…一方通行。主は何故敵意を剥き出しにしている？」
山本は一方通行の視線に気づいていた
一方通行は自分が行っている事に少し驚き
「……すまん。癖だ」
と謝った
「儂から見るに、お主らは壮絶な人生を歩んできたと見た」
その言葉に、上条は少し驚き、一方通行は眉をひそめた
「お主らが何をしてきたのか知らんが、儂等より大きな災害と戦ってきた。その証拠にあの重傷。あの傷は命を落としていると卯ノ花が言っていたぞ」
「ハッ、そんな傷でやられる俺じゃねェよ」
一方通行は即座に否定する
「……そうじゃな。お主らはタフとみた」
「……チッ」
じゃからと、山本が加える
「ここで少し体を休めるか知らぬが、ゆっくりしていくといい」
「監視下に置かれてるのにか？」
「そうじゃ」

意味分んねェと吐き捨てる一方通行
上条はもはや口出し出来ない状況になってしまった
と、今までの空気が嘘のように和やかになり
「さて、茶でも飲むか、京楽も来い」
と、京楽も参加した茶会が開かれた

（茶よりコーヒー飲ませろ）
と、一方通行は静かに苛つきながら茶をすするのであった

一番隊
挨拶完了

ヒーロー、挨拶するｉｎ二番隊

「二番隊に到着‼?」
「……はぁ」
　上条と一方通行は二番隊本部に来ていた
「いやー……何かピリピリしてね?」
「空気が違うっつう事だろォ…」
　一方通行はもう面倒くさいという顔をしている
「……入りずれぇ」
　上条はそう呟くのだった
　上条は決意し、二番隊敷地に入った
「……す、すいませーん…」
　上条は大きく、なるべく小さく叫んだ
「何やってンだァ…」
「だ、だっていきなり襲われたらやだじゃん?」
「お前がさっきやった行動からしてそれが連想されると思うが」

「……あ」
上条は今更気づいたようだ
そして上条のせいで
「動くな!!?」
忍者服に身を包んだもの達に囲まれた
上条は顔を青くし、こう呟いた
「不幸だ……」

「たくっ、尋ねるなら尋ねると前から言っとけ」
「いやすみません本当まじ」
「……はぁ」
あの後、騒ぎを駆けつけた砕蜂が事をおさめた
挨拶しにきたと上条が言ったら何故か飽きられるが
そして一方通行は睨まれた
まぁ一方通行は原因は分かっているのだが
「さて、一応名乗っとく。私は護廷十三隊二番隊隊長、砕蜂だ」
「上条当麻です」

「……」
上条は名乗ったが、一方通行は名乗らなかった
何故なら
「……」
砕蜂に睨まれているからである
恐らく一方通行は読み取っているのだろう
その目は言っている。『貴様の名など聞きたくない』と
何故こんなにも毛嫌いしているのか、一方通行は心当たりがあるのだが、あれだけでこんなにも嫌われるか？と一方通行は少し疑問に思ったのだった
「ん？一方通行、お前――――」
「さて、折角だから案内しようか」
上条が一方通行が名乗らないのに気づき指摘しようと思ったが、砕蜂に遮られた
一方通行はハァ…と溜息を吐いた
そして砕蜂の心の中では
（くそっ!!？あの白髪ムカつく!!？上条という男は問題ないがやはりあの白髪はムカつく!!？それよりも夜一様に会いたい…!!？）
と思っていた

「適当に座ってくれ」
　砕蜂がそう言い、上条と一方通行はソファに座った
「実は副隊長の大前田という男がいる。まぁ扱いはどうでもいい」
　サラッと酷い事言ったぞと上条は呟いた
　一方通行は得に聞く様子もないようだ
　どうせ質問しても睨まれるだけだろうと一方通行はそう思い耳を傾けていない
「そういえば、砕蜂さんって憧れている人っているんですね」
「な、何を根拠に⁉?」
　砕蜂は顔を赤くした
「え、だって何か女の人の写真が――――」
「その方は夜一様と言って何から何まで完璧な人なのだ‼?その美貌にあの力。さらに貴族としても有名で最高の人なのだ‼?さらにさらに――――――――――――」
　どうやら砕蜂の勢いは止まらないらしい
　一方通行はこう思った

（こいつ頭大丈夫かァ?）

と

この後上条と一方通行（寝てた）は永遠と夜一という女について聞かれそうなので上条は一方通行を叩き起こして無理やり二番隊から出た

二番隊

挨拶完了

ヒーロー、挨拶するｉｎ三番隊

「……不幸だ…」

「……」

さて、何故上条がそう呟いたのか、説明しよう

二番隊から出た上条と一方通行

問題はその後だ。順を追って説明しよう

まず、三番隊に向かいます

そしてその途中で上条が石に躓きます

それを一方通行は面倒くさそうな顔で上条を見ます

そして上条は立ち上がって歩き出します

そして何故かまた石に躓きます

もう一方通行はウザくなってます。早すぎます

上条は立ち上がって歩き出します

ですが先頭にいた上条は角で誰かにぶつかります

それは厳つい顔をした男達でした

上条はダラダラと汗を流します
一方通行はハァ…と溜息を吐きます
そしてこの後はお分かり
「待てやごるぁあああああああああ!!?」
「すんませんでしたァァあああああああ!!?」
「うるせェ…」
上条と男達は一方通行を素通りします
一方通行は上条達が行った方を見ましたが三番隊に向かいます
そして数時間した後に
上条は戻ってきました
そして何故かボロボロでした
そして冒頭に至ります
「……」
「何か言ってッ!!?」
ゼェ…ハァ…と息切れしてもちゃんとつっこむ上条
よっ、さすが不幸体質のツッコミ名人!!?
「うるせぇよ!!?」

「お前誰に言ってンだァ…？」
「……三番隊行こうぜ」
「？あァ…」
もはやジメジメとなった上条
一方通行は訳がわからないという顔でついて行った

「何か道のりが遠かったような気がする…」
「お前何回躓いたり追いかけられたりすンだァ？」
「上条さんの不幸がここで舞い戻ってくるとは…‼？」
君に幸せなどないのだよ（笑）
「うるせぇよ‼？言われなくても分かってるよ‼？」
「だから誰に言ってンだァ？」
「……もう何も言わんぞ…」
上条はもう諦めた
一方通行は？を浮かべ、三番隊敷地に入っていった

「初めまして、僕は吉良イズルです」

「上条当麻だ」
「一方通行」
イズルと上条と一方通行は自己紹介を済ましていた
敷地に入った時、イズルがいたので上条は声をかけた
そこで彼が副隊長という事で自己紹介をしたのだ
「そういえば、ここの隊長は？」
「ッ…」
上条と言葉にイズルが奥歯を噛みしめる
（……あれ、地雷踏んだ？）
上条はダラダラと汗を流した
一方通行は呆れたように溜息を吐いた
「…ここの隊長…いえ、元隊長は、裏切ったものの一人……市丸ギン…さんです…」
上条は驚愕した
あの男が隊長
どうりで…
（……くっ）
上条はあの時を思い出してしまった

「……そ、そうか。ごめんな思い出させて」
それを振り払うようにイズルに謝る
「い、いえ…大丈夫です…」
イズルはそう言ったが、表情は大丈夫じゃなさそうだ
「……なぁ」
そんなイズルに一方通行が声をかける
「いつまでも引きずってンじゃねェよ」
「ッ!!?!?」
「いつまでもその市丸ギンってやつを信じてるンじゃねェよ。あいつはもォ敵だ。それはお前も分かっているはずだ」
「……」
「それともなンだァ?お前は市丸ギンってやつがいねェと何も出来ない甘ちゃんなのかァ?」
「ッそんな訳ないです!!?」
「そうかァ?俺はそォ見えるがなァ」
イズルは顔を伏せてしまった
「テメェがそいつにどんな執着を持っているのかは知らねェ。だがそれが仇となって仲

間を傷つける事もある」
「ッぁ…」
イズルは思い出した
市丸ギンを信用していたからこそ、それは敵の思い通りに利用された
その時のショックは大きかった
それが今でも残っている
「もしまだ根に持ってンなら…」

「変われ。乗り越えろ」
「…変わる？」
「あァ」
「……変わって何が変わるんですか。乗り越えたその先はどうなるんですか」
「テメェ自身の目で見ろ」
「ッそうやって勝手に御託をつけて‼？僕の心を‼？あの時のショックも知らないくせに‼？」
「知らねェ。そんなのは知りたくもねェ」
一方通行はキッパリと言い放った

「……良いですよね…知らなくてそうやってペラペラ言って」
「……」
「……無理ですよ。この傷は一生治らない。あの時の心の傷はもう治らない」
「…それがどォした。それだけでへこたれるのかァ？」
「……あなたの言う通りですね。僕は甘ちゃんですね。弱虫で何も出来なくて……」
「……」
「あなたに八つ当たりしても何も変わりませんよね…」
「……答えは」
「……変わりたいですよ。乗り越えたいですよ」
「……じゃあ、まずはその気持ちを乗り越える事だな」
そしてここに、二人の絆が生まれた

（あれ、俺空気？）
上条は空気化していた

ヒーロー、挨拶するｉｎ四番隊

「四番隊に着いた…」
「オマエ何で落ち込ンでンだよ」
「…ハハ…何でだろ…」
　ヨロヨロと魂が抜けたように四番隊に向かう上条
　理由は前回を見て欲しい
「…四番隊って確か、俺たちが治療されてたとこだよな？」
「ああ、どうやら治療が専門らしい」
　コツコツと四番隊敷地を歩く二人
　と、そんな二人に
「待っていましたよ」
　声がかけられた
「…テメェは」
「卯ノ花烈です。ここの隊長をしています」
　笑顔を絶やさずニコニコと二人を見ていた

「テメェ、知ってたのか？」
「何をですか？」
「俺たちが来るって事を」
「ふふっ、それは女の勘というものです」
　チッと一方通行は舌打ちした
　と、卯ノ花が気になっていた事を言う
「そう言えば、お怪我はどうですか？」
「怪我？……ああ、まだ治ってない所が――――」
「それはいけません今すぐ中へ」
「え、ちょ」
　何故か卯ノ花に強制連行された上条と一方通行
（面倒クセェ）
　と一方通行は思い、上条は
（あれ、何で強制連行されてんの？）
　未だ理解出来ないでいた
「……前よりは良くなっていますし、良いでしょう」

「あ、ありがとうございます」
診察を受けた上条は礼を言い、寝ていた一方通行に声をかける
「おーい、一方通行ー」
「……ンァ？」
一方通行は眠たい目を開いて欠伸した
「お二人ともこのまま安静にしていれば完全に治ります」
「ありがとうございます。卯ノ花さん」
「ええ、ですが…あ、ん、ぜ、ん、に」
ニコォと顔は笑顔だが雰囲気が和やかではない
上条はダラダラと汗をかいた（一方通行は平気）
だって上条はこんな怪我をしても困難に立ち向かったのだ
だがこれだけは
（ヤバい…守らなかったらヤバいかも…）
上条は絶対安静にしてようと決意した
一方通行はそんなの破りそうだが
そんな一方通行を見つめる卯ノ花
「……前から気になってたんですが」

「あァ？」
「一方通行さんって女性みたいな身体をしていますね」
　ピキッと一方通行は固まった
　上条はあ～確かにと同意した
「……ハァ⁉？何処をどォみたら女みたいな――――――」
「だって、雪みたいな白い肌に女も羨む細っそりした体型、アルビノみたいじゃないですか」
「卯ノ花さんアルビノ知ってんの⁉？」
「ふざけんなァァああああああああああああ⁉？」
　どうやら禁句だったらしい
　だが卯ノ花は続ける
「ちゃんとご飯食べているのですか？肉とか食べていたらもう羨ましすぎますよ」
「あァ肉だァ⁉？食べてるよ肉クソ食べてるよ⁉？」
　その言葉にピキッと今度は卯ノ花が固まった
「……太らない秘訣を教えて下さい」
「知るかァァああああああああああああああああああああ⁉？」
「一方通行落ち着けェェえええええええええええええええ⁉？」

今にも能力を発動しかねない一方通行を幻想殺しで止める上条
ちなみに卯ノ花は本気だそうだ

そんな三人がいる部屋の外で
（……タ、タイミングを逃してしまった）
虎徹勇音が後悔していた

ヒーロー、挨拶するｉｎ五番隊

「次は五番隊…」
「ハァ…」
前回、太らない秘訣を散々聞かれた一方通行
そして後から乱入してきた勇音にも聞かれ、マジで一方通行がブチ切れそうだったので上条が無理やり四番隊から出た
そして一方通行はある意味で疲れており上条はある意味で疲れている
もはや一方通行は帰りたいという一心だ
だが上条はちゃんとしていて全部の隊にこのまま回るらしい
もはや溜息しか出ない一方通行
「あ、ここか」
そして着いた五番隊
「すいませーん」
上条が声をかけると、中から男の死神が出てきた
「あなた達は?」

「あ、俺は上条当麻って言って、あいつは一方通行。挨拶に来たんだけど…」
そう上条が言うと男はバツが悪そうな顔をした
「挨拶ですか…。日を改めた方が良いと思いますよ」
「え、何で？」
「それが＿＿＿＿＿＿＿＿」
男がいうにはこうだ
無事に退院してきた五番隊副隊長雛森桃
だが雛森は帰って早々部屋に閉じこもってしまったのだ
食事もあまり摂らず、部下が尋ねれば「一人にして下さい」という言葉しか帰ってこなかった
さらにしつこく言うと「うるさいです‼？一人にして下さいってば‼？」と、怒られる
余程藍染が裏切ったのを、藍染の手で斬られた事を、藍染の手の中で踊らさせていた事をショックに思ったのだろう
部下は心配で堪らず、他の隊から、特に十番隊の松本乱菊に来てもらおうかと思っていた
その矢先に上条と一方通行が来たという事だ

「……チッ」
それを聞いた一方通行は舌打ちし
「おい、その部屋は何処だ」
男に、雛森がいる部屋を聞いた
「え、えーと…案内しますけど…」
「一方通行？どうしたんだ？」
上条の問いに一方通行はニヤリと笑うだけだった

「……藍染隊長」
雛森は寝転がり、敬愛している人物の名前を口にした
「……ふっ…うあ…」
そして涙が溢れた
何故、裏切った
何故、騙していた
何故
―――――――
そればかり考えるとどんどん涙が溢れてくる
「…た、いちょぉ…」

そんな時だった
「雛森副隊長、お客さんが…」
部下が外から言った
「……追い返して下さい」
「いえ、ですが」
「追い返して下さい‼?今は誰とも会いたくないんです‼?」
そう言った途端
ギィン‼?と、障子が飛ばされた
「⁉?」
雛森は飛び起き、戦闘態勢をとった
そこから現れたのは
「よォ、お前が雛森ってやつか?」
白髪の男だった
「ここです」
男に案内されたのは一室の座敷

まずは男が声をかける
「雛森副隊長、お客さんが…」
だが雛森の返答は
「……追い返して下さい」
「いえ、ですが」
男も負けじというが
「追い返して下さい‼?·今は誰とも会いたくないんです‼?·」
気迫で押された
そして一方通行は舌打ちした
と、上条が足を上げている一方通行に気づき、顔を青ざめた
「ア、一方通行?·まさか…」
「心配するな、当てねェよ」
そして一方通行は障子を
蹴った
それだけで障子は吹き飛んだ
そしてつっかえていた棒も倒れた
そして暗い部屋を目を凝らしてみると、臨時体制をとっている少女がいた

　それに一方通行は確認をとる
「よォ、お前が雛森ってやつか？」

「そ、そうですが…あなた達は誰ですか⁉？」
「挨拶に来たって事だよ。そして来てみたらテメェが閉じこもっていたって話だ」
「…ッ」
　一方通行は雛森の正面に行く
「本当にここは三下が多いなァ。上司がいねェと立ち直れない性格なのかねェ」
「さ、んした…⁉？」
　どうやら三下という言葉が気に入らないそうだ
「三下って、私は自分でも――――⁉？」
「出来るってかァ？」
　先を言われたせいで不機嫌になる雛森
　そして一方通行はキッパリという
「それが三下なんだよ」
「ッ⁉？」
「そォやってぐちぐちぐちぐち自分でも出来るって言っておきながら、上司にも騙され、

上司に踊らされ、挙句の果てにそれにショックを受けて部下に迷惑をかける」
「‼?そ、れは…整理がついていなくて…」
「そして部下に当たり、まだその真実を引きづりながら暗い部屋に閉じこもって現実逃避する。明らかに三下じゃねェか」
もはや雛森は何も言えない
だってこれは事実だから
紛れもない事実だから
「…何も知らないあなたが、そうやって気軽に喋らないで下さいよ。私の気持ちがわかりますか?今まで信じていた隊長に騙されて、斬られて、そして真実を告げられて、この気持ちがわかりますか?心の柱が崩れ去っていく気持ちを、絶望を、信頼していた人に裏切られた気持ちを‼?確かにあなたの言い分は合っています。でも、それ以上にショックだったんです。裏切られた気持ちが、白ちゃんを傷つけてしまった自分の愚かさが‼?これが、この気持ちがあなたにわかりますか⁉?」
一方通行はそれを黙って聞いていたが
「わからねェな」
またキッパリと言った
「ッ‼?だったら＿＿＿＿‼?」

「だがそれがどォした」
　雛森を言葉を遮る一方通行
　一方通行は続ける
「裏切られた。それが何だ？だったらそれを受け止めて裏切られた相手に復讐すればいい。それか、もっと強くなればいい。柱が崩れ去ったらそれをまた立て直せればいい。愚かさ？ならその愚かさを塗り替えればいい。世界は残酷なんだ。騙すか騙されるの世界なんだ。テメェのよォな三下は闇の世界では駒なんだよ」
「こ、ま…」
「その絶望を乗り越えてこそ強さを手に入れる。そして強くなる。だが今のテメェはまだ三下、いや、それ以下か。兎に角テメェは弱いという事だ」
「……」
「……俺が言いたかったのはそれだけだ。後はテメェ次第だ」
　そして一方通行は部屋から出た
　すると、上条が入れ替わりでやってきた
「ま、あいつ口下手だけどお前を心配してるんだよ」
「……あなたは？」
「あ、俺は上条当麻、そんでさっき出て行ったのが一方通行だ」

「……上条さんと、一方通行…さん」
雛森は一方通行が出て行った方を見つめた
「……上条さん」
「ん？」
「……私は、超えられるんでしょうか？」
雛森は不安になったのか、上条に聞いてしまった
上条はこう言った
「超えられるんじゃない。超えるんだ‼？」
その言葉を聞いた雛森は
「……ッはい‼？」
笑顔で返事した

その後、雛森はいつも通りに戻ったという

ヒーロー、挨拶するｉｎ六番隊

「……なぁ、今までと違くね？」
「金持ちなんじゃねェの…」
　上条と一方通行はとある屋敷に来ていた
　と言っても、六番隊隊長、朽木百哉に会うためである
「ここって六番隊の…」
「…いや、違うと思うぞ。多分ここはあの男の家じゃねェか？」
「家⁉？もしかして偉い人⁉？」
「隊長なンだから偉くて当然だろォ…」
　呆れる一方通行
　あ、そうかと上条は理解した
「……入って」
「入るぞォ」
「躊躇なく入った⁉？さすがＬｅｖｅｌ５…」
　一方通行はズカズカと入ったので上条も後を追う事にした

「……あの～」
「……」
「……」
部屋は静まり返っていた
上条の声が虚しく響く
そして上条は思った
（何でこうなったのォォおおおお⁉？）
いや、叫んだ
あの後、確かに部屋に案内されたが
「……上条当麻と一方通行か」
「ここの連中は何で来ることが分かるンだよ…」
「霊力で分かる」
百哉は二人の方を見ず、「座れ」と指示した
そして座敷に上条は正座だが一方通行は足を崩して座っていた
問題はここからだ
「……」

「……」
「……」
誰も喋らない
コツコツコツコツと時間が進んでゆく
上条はチラッチラッと百哉と一方通行を交互に見るが
一方通行は
「……」
睨み
百哉は
「……」
静かに目を閉じてピクリとも動かない
そしてあのシーンに移る
「お、お二人さん？何で一言も喋らないのかな？上条さんもう気迫に押されそうなんだけど…」
「……」
「……」

「一方通行兎に角睨むのをやめよう。うん、やめてそれ俺に向けられているようで怖いから」
「……」
「何でこっち見たの⁉？え、何、もしかしてうぜェなとか思ってる？ねぇ思ってるよな？」
「ああ」
「何でだよォォおおおおおおおお⁉？上条さん被害者ァァあああああああああああああああああああ⁉？」
ついには上条は叫んでしまった
それを一方通行はやはりうぜェと言いそうな顔で顔を顰めていた
一方の百哉というと
「……」
まだ目を閉じていた
誰か来てくれと本気で願った上条だった
と、タイミングが合うかのように
「失礼します。隊長……」
いかにも不良な阿散井恋次がきた

「来たと思ったら怖そうな人来た⁉？」
「初対面で失礼な事言うよなお前⁉？」
「何？上条さんにはもうやられろという思念しかないのか？そうか神なんてくそォォおおおおおおおおお‼？」
「お前は何に悩んでんだよ⁉？」
恋次が何故か悲しんでいる上条の事が理解出来ない
一方の一方通行と百哉はというと
「……あれはいつもなのか？」
「ああ、あいつが言うに不幸体質らしいからなァ」
いつの間にか和んでいた
「……コーヒー飲みてェ」
「コーヒーならあるが？」
「ンだァ？ブラックか？」
「ブラックもあるぞ」
「じゃあくれ」
そしてブラックコーヒーを受け取った一方通行
和んでいた

一方の上条と恋次はというと

「もう上条さんは慣れましたことよ…いつも不良に追いかけられてビリビリに追いかけられて空き缶踏んで滑って財布どっか無くして自販機に二千円呑まれて暴食シスターに食費全部持ってかれてもう上条の人生はわかったことだけど不幸しかないんだああ慣れたのになんでこんなに悲しくなるんだろやっぱり今改めて知ると悲しくなるなもう俺の人生不幸だぁ」

「お、おい？お前なんかネガティブになってないか？そんで内容なんか地味に不幸なんだが」

「ええ地味でも不幸なんですよ上条さんの人生はもう不幸万歳なんですよ」

「そんなマイナス思考になるなよ。きっと幸運が訪れるって」

「訪れても上条さんは不幸から逃れられないんです‼？幸運あること不幸あるなんです‼？神のご加護も消しちまうこの右手のせいで幸運が訪れないのです‼？」

「ご加護だぁ⁉？なんだよその右手‼？反則じゃねぇか‼？」

「ご加護に食いついてくれえありがとうだけどそれのせいで不幸が訪れるんだよォォおおおおおおおお‼？」

マシンガントークが行われていた

「……聞くと惨めな内容だが」

「俺は慣れた」
　ズズッとコーヒーを口に含む一方通行だった

「てかお前らなんで和解してんの⁉？」
「今気付いたのかよ…」
「あ、隊長。書類が」
「わかった。少し待て」
　漸く落ち着いた上条
　一方通行はコーヒーを飲み干していた
　そして恋次も同席した

「さて、兄の名を改めて聞こう。恋次も知らない事だしな」
「……めんどくせェ…」
「そう言うなよ。俺は上条当麻、こっちが一方通行だ」
「阿散井恋次だ」
　そしてお互い自己紹介をして、何か話そうとした時
「びゃっくーん‼？お菓子ちょーだい‼？」

幼いピンク髪の女の子が訪れた
「…………これを持っていくがよい」
そして百哉が出したのは
「………キャラクター？」
(似合わねェ…)
一方通行の言う通り百哉とは全然イメージが違う何かのキャラクターのクッキーだった
そして女の子はそれを見て
「えー何これーいらなーい‼？」
と言って去って行った

テンテンテンと静まり返った
そして百哉は暫し無言
そして鞘に手をかけ…
「え、ちょっと待ってなんで上条さんに向けてんの？ちょっと百哉さ」
「散れ　千本桜」
「どわアアああああああああああああああああ‼？不幸だアアあああああああ

ああああああああああああああ‼?」

よっぽど悲しかったのか、はたまた上条のせいなのかわからないが、上条はガードはしたものの隣の部屋に突っ込んでしまった

そして一方通行と恋次は心の中で一致した

（そんなに悔しかったんですね…）（ンだなァ…）

そして何故かスッキリした百哉であった

ヒーロー、挨拶するｉｎ七番隊＆九番隊

「身体中が痛い」
「そりァ真正面に受ければなァ」
　所々傷だらけ（前回を見れば分かる）の上条は若干引きずりながらも一方通行と共に七番隊に向かっていた
「あぁ…ヤバい、こんなの卯ノ花さんにでも見つかったら…」
　顔を青くし、ガクガクと震える上条
「ア？別にどォでもいいだろォ」
「あなたはＬｅｖｅｌ５だからいいんですけど上条さんは健全なＬｅｖｅｌ０なんですからね‼？殴り合いなんて負けたも同然ですとのことよ‼？」
「じゃあお前に二回負けてる俺はお前より弱いってかァ？」
　それを聞くと上条は目を泳がせ
「……ドンマイ」
「オーケー、今すぐ楽にしてやるから止まれ」
「す、ストップ‼？ゴメン一方通行‼？いやでもほんとに…すみませんすみません‼？

言わない‼?言わないからだからそんな睨まないで‼?臨時体制とらないで‼?」
両手で全力で阻止する上条
一方通行はもういつでもいける（殺す）という感じだ
と、そんな二人に
「何をしているのだ?」
低い男の声が
「あ、いえ‼?別に大した事では…」
そして上条の言葉が途切れた
そして驚きを露わにする
そう、低い男の声の正体とは

犬
犬なのだ
いや、犬ではないかも知れない
別の種類かも知れない
（……犬‼?）
上条と一方通行は心の中で一致するのだった

（……いや、ここならどんな野郎でも何故か納得いく。ならこいつは人狼かァ？いや、ただ単に被り物をしているやつかも知れねェ）

否、一方通行は考えていた

と、犬の男の後ろに

「…あ、お前ら確か…」

９６と頬に刻んだ男が現れた

「……あなた達は？」

「ん？ああ、まだ名を名乗っていなかったな。儂は狛村左陣。七番隊隊長だ」

「俺は曾佐木修兵。九番隊副隊長だ」

犬の方が狛村左陣。９６と刻んだ男が曾佐木修兵だ

「俺は上条当麻、そんでこっちが一方通行だ」

「……」

一方通行は未だに狛村を凝視している

と、そんな視線を感じだのか、狛村が説明した

「言っておくが、これは着ぐるみではないぞ？」

「うえっ⁉？」

「……」

上条は完全に着ぐるみだと思っていたらしい
一方通行は分かっていたらしい
「人狼か？」
「お、良くわかったな。儂は人狼だ」
えー…と上条はまた驚いた
一方通行はやはりという顔で溜息を吐いた
「それにしても、ここから行けば七番隊だが…七番隊に何か用事だったか？」
「俺たち、挨拶しに行こうと…」
「何だそんな事か。なら九番隊は俺が言っといてやる」
「え、いいんですか⁉？」
ああと修兵は返事したのでありがとうございますと上条はお礼した
「……あ？」
一方通行は何かを見つけた
いや、それは真っ直ぐに上条に向かっていき
「いてぇ⁉？」
当たった
カランと転がる。どうやら空き缶のようだ

（あ、空き缶がクリーンヒット…。運がないやつだな…）

　上条の不幸体質を知らない二人はそう思うしかなかった

「な、何で空き缶が飛んでくるんだ…‼？」

「ハァ」

もはや一方通行は言う気にもなれない

上条は空き缶を拾い、何処かに捨てようとした（ゴミ箱に）

と、曲がり角の所で

「ふざけんなよテメェエえええええええええええ‼？」

怒号と共に誰かが投げ飛ばされた

そしてその誰かは上条に当たった

当然上条も

「のわァアあああああああああああああああ‼？」

　吹き飛ばされた

「あれは行かなくていいのか…？」

「行きたければ行けばいいじゃねェか」

「俺は行ったら巻き込まれそうな感じが…」

ちなみにその誰かとは上条が見た限りツルピカ頭の男だったような気がするが、見間違いなのだろうか

ヒーロー、挨拶するｉｎ十番隊

「……」
「……と、冬獅郎く～ん？」
「日番谷隊長だ‼？」
「別にいいだろそンな事ォ…」
変に日番谷隊長を強調する冬獅郎
そしてその冬獅郎は今機嫌が悪い
それは

数時間前
「確か十番隊って近かったよな‼？」
上条は家の方向に向かい、近づこうとした所で曲がる
「俺が知るかよ…」
それを一方通行が後を追う
何度も言うが今は全隊に挨拶中だ

後は十番隊、十一番隊、十二番隊、十三番隊のみ
それで十番隊に向かっている途中なのだが
「……ん？どわぁ!!？」
上条は曲がり角で誰かにぶつかった
それに一方通行は足を止める
そして一方通行は絶句（驚愕）する
「……」
「むー!!？むーうー!!？」
「痛た～……あ、君たちやっほー」
気軽に声をかけ、尚且つ上条の上に乗っているのは松本乱菊
爆乳女性とだけ言っておこう
さて、ここまで来れば分かるだろう
上条が今どんな状態か
「……オイ」
「ってやば、早く逃げないと…」
「オイ」
「ん？何？」

「早くどけ。三下が死ぬぞ」
「え？……うわァァあああああ‼？」
乱菊は現状を思い出し、上条から退く
いや、赤面している訳ではない
胸を押さえている訳でもない
いや、それは後回しだ
「‼？ゲホッ‼？…あ～…死ぬかと思った」
「見事に止められてたなァ」
なんというあの（男にとっては）ラッキーに会ったにも関わらず、一方通行は羨ましいの一言も呟かない
それはそうだろう。彼はかつて同居人の裸を見ても動じなかったのだから
もはや男なのか疑う
そしてそんなラッキーに会った上条は
「……柔らかかった」
だれかこいつを殺してくれと上条のクラスから誰かが言うであろう
そしてクラスメートから鉄槌が来る事も間違いなし
これは確定。うん

と、話を戻して
「ごっめ～ん、大丈夫？」
乱菊は謝る気ゼロだ
「いえ、大丈夫です…」
「それより、何か追われとるみてェだが…」
一方通行がそう言うとハッと思い出し
「そ、そうだった‼？早く逃げないと――――――――――――」
するとその時

「松本ォォおおおおおおおおおおおお‼？」

怒号が響いた
「ひっ、き、来たァァあああああ‼？」
それを聞いた乱菊はシュッとその場を去った
去り際に「じゃあね‼？三下くん‼？白髪くん‼？」と言ったが上条が言いたい事は一つ
「俺三下じゃなァァあああああああああい‼？」

「三下じゃねェか」
「一回黙れ‼?」
「松本オオおおおお‼?今回は許さねぇぞオオおおおおおおお‼?」
と、その時曲がり角から銀髪の少年が現れた
白い羽織を着ている所、どうやら隊長らしい。と一方通行は考え
「オイ、その松本っつう女、何やったンだ?」
「あぁ?誰だお前ら」
「ああいや、実は挨拶しに行こうと…」
「挨拶?……ああ、確か回ってるんだったよな。なら俺は十番隊隊長日番谷冬獅郎だ」
「……俺は上条当麻だ。ふんで、こっちが一方通行」
一瞬間が合ったのは隊長という言葉に驚いたからだろう
そして冬獅郎は気づいた
「しまった‼?見失った‼?」
「あ」
「ハァ…」
いや一方通行のせいだが
そして冒頭に戻る

今は隊長室にいる
そこでソファに腰掛けている上条と一方通行
「でも、乱菊さんって何したんだ？」
見た目が子供なのか、タメ口で話している
「どォせ仕事サボったとか、どこかに何か隠してるってやつじゃねェの？例えば酒とかなァ」
「な、何で分かった…」
「え、当たってるの‼？⁉？」
一方通行恐るべし。と上条はやはりＬｅｖｅｌ５と再度認識した
「松本めぇ…何回酒をここに入れるんだよ…今回はくそ入ってたし」
「……苦労してるんだな」
「苦労してるわ」
上条の答えを華麗に返す冬獅郎
いやイライラしているだけかもしれない
一方通行は寝ようかと思っていた

そんな時、グッドタイミングに

「今なら隊長はいない……はず……」
乱菊が入ってきた
冬獅郎、上条、一方通行は乱菊に注目し
乱菊は三人に注目する
そしてフリーズし

「松本ォォおおおおおおおおおおおおおお‼？」
「きゃあアアあああああああああああああ‼？」

その後、急遽参加した上条だが乱菊のスピードには勝てず、一方通行にお願いし（土下座をめっさかまして）一方通行が意図も簡単に乱菊を捕まえた（冬獅郎と協力してだが）
やはりＬｅｖｅｌ５は恐ろしいと再確認した上条であった

そして乱菊は勿論罰である

ヒーロー、挨拶するｉｎ十一番隊

「十一番隊に着いた…けど…」
上条と一方通行は十一番隊に着いた
だが何か騒がしかった
「……あっちからかァ」
上条と一方通行は騒がしい方へ向かった

「ふざけんなよこのツルピカ頭‼?」
「んだとこのアホ面野郎‼?」
「「やんのかおらァァあああああッ‼?」」
「……」
着いたはいいが上条と一方通行は唖然するしかなかった
なにやら喧嘩のように見えるが、喧嘩のようなものを超えている
何故なら、竹刀で叩き合っているからだ
上条は前にいた十一番隊の一人に現状を説明してもらう

「なぁ、あいつら何であんなに怒ってるんだ？」
「ん？誰だあんたら」
「あいや、俺は上条当麻で、こいつは一方通行。挨拶に来たんだけど……それより説明を下さいませんか？」
「ああ、実はな～、一角さんが剣道してる時に黒崎が一角さんに申し込んでな、それで何か言い合ってそんでどっか行って、ふんでまた帰ってきて試合をやり直したんだ。だけどまた言い合ったみたいでな～。かれこれ十分位言い合ってはああやって剣道してるよ」
「剣道なのか⁉？あれ剣道なのか⁉？レベル違い過ぎない⁉？もうあれ剣道じゃねぇよ何で道場亀裂入ってるの⁉？え、剣道ってそういう危険なやつだったの⁉？」
「……あれの何処が危険なンだァ？」
「黙れＬｅｖｅｌ５‼？」
「ンだとゴラ」
「すみませんだからその右手を降ろして‼？」
　何故かこっちはこっちで問題になっている
　今にも上条に殴りかかり（血流操作）そうな勢いで右手を準備し、上条はその右手首を必死になって止めている

「三下右手をどけろ退けた瞬間殺す」
「死刑宣告されて退く馬鹿がいるか‼?」
「なら無理やりでも殺す」
「何で殺したがるの⁉?」
「ムカついたから」
「何処で⁉?」
「やべっ、あんたら逃げろッ‼?」
「え?」「ア?」
　二人が道場の方に目を向けると
　ガラガラと崩れていく道場
「のわァァあああああああああ‼?」
「チッ」
　上条と一方通行は道場から離れて行った
　そして道場は完全に崩れ落ちた

「馬鹿なのかい君達」
　斑目一角と黒崎一護を説教しているのは綾瀬川弓親

弓親は腕を組んで一角と一護を見下している
「君達は一体いくつ壊せば気がすむんだい？それに喧嘩の内容がそんな初歩的な事だなんて……美しくない」
「だってこいつが」
「黙ってくれないか？」

そんな様子を上条と一方通行は遠くで見ていた
「……思ったンだが」
一方通行が珍しく何かを聞いてきた
「ん？」
「何であンな攻撃で道場は崩れるンだァ？」
「人間で考えちゃかん。学園都市で考えちゃかん」
「ア？別にあんな攻撃大した事ねェだろ」
「人間で考えなさい」
「その発言だと俺は人間じゃねェって事で受け取るが」
「いやちょっと待ってまずその右手を降ろそう？ねぇ降ろして下さいお願いします!!？」

「認めるが死ね」
「認められたのに殺されるの‼?‼?不幸だァァああ‼?」
　こっちはこっちでまた問題になっていた

「な、何かあっち喧嘩してないか?」
「喧嘩っていうレベルじゃないと思うけど?」
「……ってあ‼?あいつ確か上条当麻と一方通行‼?」
　一角が暴れている上条と一方通行を指差して叫んだ
「ん?上条と一方通行を知ってるのか?」
「知ってるも何も、隊長が仲間に入れたがってたんだよ」
「ああ、確かそんな事言ってたね」
　弓親も思い出したようだ
「あれ、剣八は」
「離れるぞ」
「え?」
　一角がいきなり離れると言ったのに困惑する一護

その時

「なら俺とやりあおうぜェェェェェェェェェェ!!?」

「なっ!!?」

一方通行の後ろから刃が迫った

一方通行は反射し、刃を向けた相手と対峙する

「よぉ、白髪」

「……テメェ」

「自己紹介なんっうのはしねぇ、だからやりあおうぜ?俺はお前の力に非常にワクワクしてんだよ!!?」

更木剣八はとてつもない速さで一方通行に迫った

「ッ!!?」

一方通行は手で受け止め、弾く

「やっぱりこんなもんじゃ効かねぇかァァあああああああああああああああああ!!?」

剣八はさらに力を込め、一方通行に向かって振り落とす

(大丈夫だ、こいつのベクトルは掴んでいる。また弾き返して――――――――

）
だが
剣八の刃は一度止まったが
ズバァッ‼?と、一方通行を斜めに斬り裂いた
「がッ……ごッ…⁉?」
一方通行は数歩後ろに下がる
そして傷口に手を当て、血流を逆流させる
そして一方通行は焦りを見せた
（こいつ、俺の反射膜を〝無理矢理斬った〟⁉?オイオイ、なンてやつだこいつァ）
「ハッハァ‼?まだ終わらせねぇぞ‼?」
どうやら休む暇はなさそうだ
一方通行は覚悟を決め、剣八に迎え撃つ
「おい‼?早くあいつら止めないと…ッ‼?」
「そうだ‼?早く行かせろ‼?」
「まぁ落ち着け」
上条と一護を止める一角と弓親

「何で止めるんだよ‼?」
「邪魔させたくないからだ」
「そんな理由で…ッ‼?」
「いいから見てッ…‼?」
突然の強風に会話を途切らせる四人
強風が現れた所を見ると

「く、くかきこけこここかきけこきが‼?」

一方通行がプラズマを結集させていた

「あァ?なんだそりゃ」
剣八は一方通行か行っている行動が理解出来なかった
だが、何か大きなものが出来るというのは馬鹿でも分かる
「さァて、覚悟は出来てるかァ?」
一方通行はニヤリと、剣八を見る
「ハハハッ‼?いいぜこいよぉ‼?白髪ぃ‼?」

プラズマと刃がぶつかる

その時

「ストォーーーーップ!!?」

第三者の阻止でプラズマは消され、刃は止められた

「!?」

第三者は

上条と一護だ

上条と一護は危ないと感じ、一角と弓親の制止を振りほどいて止めた

「もう止めろ!!?」

「剣八、その刀を降ろせ!!?」

上条と一護の必死の制止により

「チッ…」

剣八は戦う気が失せたのか、刀を納めて去っていった

「あ…」

一方通行はガクリと膝から崩れ落ちた

「!?一方通行!!?」

この後、一方通行は四番隊に搬送された
十一番隊は一角と弓親とその他に挨拶したので大丈夫と上条は決めた

ヒーロー、挨拶するｉｎ十二番隊

「うわぁ……もう塔だな…」
上条は十二番隊に来ていた
一方通行は前回を見て分かる通り、今は四番隊にお世話になっているので、今日は上条一人なのだが
「えーと……す、すみませーん」
「はい」
「のわぁ!!?」
背後からの突然の声に上条は一瞬寿命が縮んだであろう
「び、びっくりした…」
「こんにちは、上条当麻様。マユリ様がお待ちしています」
「……マユリ?」
「涅マユリ様、十二番隊隊長でございます」
あ、そうかと、上条は納得した
「えーと……君は?」

「……涅ネムです」
「涅？家族なのか？」
「行きましょう」
「え、ちょ」
「行きましょう」
「ちょ、待ってェェええええ!!？」
ネムに半ば引きづられるのうに十二番隊敷地に入った上条

「……これ、何？」
「企業秘密です」
ビーカーの中に入っている何か分からないものを聞く上条だがネムは企業秘密と言って終わらせた
「……そ、そうか」
「そうです」
押される感じで終わった会話
そして沈黙タイム
（……嫌な予感がするんですが…）

上条は一早く危険を察知した
（…何か訳のわからないのがあるし……）
キョロキョロと見渡す上条
すると
「着きました」
ネムが立ち止まったのは一つの自動ドア
「うわぁ……景観崩してるな」
「こちらでマユリ様がお待ちしています」
上条の言葉を無視してネムはドアを開けた
するとそこには
「やぁ、待っていたヨ」

（……あ、もう嫌な予感しかしない）
上条はマユリの外観を見て真っ先にそう確信した
何故なら異様に長い爪に異様に変な顔（失礼だが）もう見るからに変なのだ
「お前が上条当麻だネ？」
「は、はい、そうです…」

「一方通行はどうしたんだネ？」
「あ、あいつはちょっとトラブルがあって…」
「……それは残念ダ」
マユリは心底残念そうに言った
そして次には突拍子のない事を言った
「一気に実験出来ると思ったのだがね」
「……ん？」
「いや、一人一人検証して行くのもいいかもネ」
「……ん？」
上条は訳が分からないという顔をしている
そんな事御構い無しにマユリは
「ネム、彼を抑えてくれ」
「はい」
「……あのぉ…何を…」
「何、ただ〝右腕を切断するだけ〟だからネ」
その事を聞いた上条はダラダラと汗を流し

「不幸だアアああ‼？」

「…チッ、ここかァ…」

　一方通行は十二番隊に来ていた

「さっさと済ませて――」

「アアああああああ‼？」

　ア？と一方通行は立ち止まった

　そして

「不幸だアアああああああああ‼？」

「‼？ぐふォ⁉？」

　上条は華麗に一方通行を掴み十二番隊敷地から離れていった

　その時上条は一方通行の首根っこを掴んだのだが……その後は彼らの問題であろう

ヒーロー、挨拶するｉｎ十三番隊

「何か言う事はあるか三下ァ」
「申し訳ありませんでした」
説教中
その理由は前回を振り返ろう
前回、マユリに実験（切断）させられそうになった上条は前走力で十二番隊敷地を出る前に一方通行が居たのでそれに気づいた上条は
（一方通行も実験させられる⁉？）
と思い、一方通行を連れて十二番隊から逃げた
そして上条はある程度進んだ所で止まったのだが
「おい…離せ…」
「え？…のわァァあああ⁉？」
一方通行が窒息しそうでした
上条はご丁寧に右手で首根っこを掴んで一方通行の首を少しづつ締めていたのだ
そして説教中

「いや、本当にすみませんでした」
「お前、俺が病み上がりっての分かってるのかァ？これ以上四番隊に行かせるンじゃねェよ」
「すみませんでした」
「次やったら逆流な」
「それは勘弁して下さい‼？」
見事な土下座をかました上条
一方通行はポリポリと頭を掻くすると
「おや、君達は」
「ア？」
上条と一方通行の前から誰かがやってきた
白髪の長髪で優しそうな男だ
「あなたは…」
「浮竹十四郎。十三番隊隊長だよ」
「あ、俺は上条当麻です」
「……一方通行だ」

浮竹はニコリと笑いかけた
「どうしたんだい？」
「えーと……説教中」
「ん？何かやらかしたのかい？」
「まぁ……そんなところです」
「ハハハッ、それは不運だったね。良かったら寄っていくかい？僕もこれから帰る所なんだ」
「え、いいんですか？」
ああ、と浮竹は了承した
「じゃあ……お邪魔します」
「どオせ行くンだから良いだろ」
「いらっしゃい。こっちだよ」

十三番隊はほのぼのとしていた
「どうぞ」
「あ、どうも」
浮竹はお菓子を差し出した

　上条は特に緊張する事もなく、リラックスしていた
「そういえば、怪我はもう平気なのかい？」
「俺は大丈夫ですけど…一方通行が」
「眼短野郎に斬られた」
　一方通行は間髪入れずに答えた
「眼短…？……あぁ、更木か。それは不運だったね」
　浮竹は気の毒そうに
「彼はああいう人なんだ。もしかしたら上条くんにも勝負を挑むかもね」
「え〃」
「おーそれはいいこったァ」
「いや賛成するな‼？」
　和やかな雰囲気の中に
　また騒がしい人達が追加される
「隊長ォォおおおお‼？お茶持ってきましたァァあああああ‼？」
「俺が持ってきましたァァあああああ‼？」
　バターン‼？と障子が全開に広がれ、そこから二人の男女がやってきた
「仙太郎、清音、ありが」

「あ」
浮竹が礼を言うと同時に清音が足を踏み外した
それは真っしぐらに
上条の頭上へ
バシャァァ!!?と熱々のお茶が上条に掛かった
「あっっっうゥゥうううううううううッッッ!!?!!?!?!?」
「!!?待てこっち来ン」
そして上条と一方通行はぶつかり仙太郎の足に激突
「のわぁ!?」
そして仙太郎もぐらつき、三つの茶碗は真っしぐらに
上条と一方通行の元へ
バシャァァ!!?とまた熱々のお茶が上条と一方通行に掛かった
「あっっっうゥゥうううううううううううううッッッ!!?!!?!?!?」
「……」
そんなに熱いのだろうか
上条はのたうちまわるが、一方通行は顔を傾けたまま動かない
実はあの時上条の右手が一方通行に当たっていたのだ

だから掛かってしまった
「だ、大丈夫かい⁉？」
「う、うわァァあああああ⁉？い、今すぐ持ってきます⁉？」
「タオル⁉？タオル持ってこい⁉？」
「言われなくてもそうするわよ⁉？」
清音はタオルを持ってくる為部屋を出て行った
「大丈夫かい⁉？上条君⁉？一方通行君⁉？」
「だ、大丈夫……」
「……ハァ」
一方通行は溜息を吐き、そして
ギィン⁉？と、自分の掛かっていたお茶を取り除いた
「⁉？え、おい兄ちゃん⁉？あんた今何やった⁉？」
「うるせェ……」
「これは凄いな……」
一方通行は不機嫌そうに良い、浮竹は絶賛した
そして上条は
「不幸だ…」

と言うのだった

この後、清音が持ってきたタオルで上条は身体を拭いて、上条と一方通行は浮竹達と一緒に駄弁って（一方通行は寝て）上条と一方通行は帰った

ＢＯＵＮＤ　Ａ　ＨＥＲＯ
エネミー、動くものと待つもの

上条と一方通行が来て数日が経った
今や二人はここの生活になれ、上条はよく隊に出向くようになった
一方通行は寝ているかコーヒー飲んでいるかだが

「あれ…ルキアは？今日見なかったですよね？」
上条はルキアがいない事に気づいた
「ああ、ルキア君なら現世に行っているよ」
「え、何で？」
「何やら命令で出向いたそうだが…」
どうやら浮竹は何も知らないようだ
「ふ～ん……大丈夫かな？」
上条は少し心配したが、大丈夫だろうとお茶を飲んだ

現世が大変な事になっていると知らずに

「……ふっ」

少年は何処かの遺跡の中にいた

そして少年の見つめている所は壁なのに何故か不敵に笑った

その少年の後ろから

「何をしているんだ?」

銀髪の男　狩矢神が後ろから歩み寄ってきた

「いやぁ?何も」

「それで納得するとでも思ったか?お前はまだ信用していないんだ」

「信用しなくて結構。俺の目当ては上条ちゃんと一方通行だからな」

まぁ上条ちゃんの方が本命だけどな。少年は付け加えた

「お前が言う上条とは、そんなに絶賛するものなのか?」

「絶賛するぜ?会ってみれば分かるさ。まぁ俺も会ってないけどな」

「……その内な。お前の今の目的は尺魂界に行く事だろ?そのために俺達の一時的に仲間になったと…」

「それがわかってんなら警戒解いて欲しいな」
少年はニヤリと笑った
狩矢はより一層眉を潜め
「ほざけ」
「おやおや、手厳しいな。……あ、言っておくが俺さお前達の命令は受けないからな。以上」
「ハッ、お前の助け等いらん」
狩矢は一度少年を睨み
「行く時になったら教えろよ～」
少年は手を振りながらまた前を向いた
「……よくわからんやつめ」

「さ～て……うちのボスは何処かに行ったし、今自由だし、のんびり待とうかね～」
少年は欠伸し
「ハハッ、上条ちゃん達、お前達に会えるのを楽しみにしてるぜ」

とある白い大地
「……何処だ、ここは」
男は独り佇んでいた
「俺は確か……。ああ、そうか、死んだのか」
男は辺りを見渡してそう確定した
すると

白い化物が男を吹っ飛ばした

男は白い大地を転がっていく
化物は男に歩み寄っていった
だが

「いてぇな」
男は無傷だった
その姿をみた化物は一瞬歩みを止めた
男は砂を払い、化物を睨んだ

「そしてムカついた。お前不運だったな～、俺は今……非常にムシャクシャしてんだよ」
その時

白い刃物状の物体が化物を貫いた
化物は悲鳴を上げた
「……まさか不死身ってやつ？……これは……殺りがいがあるじゃねぇか」
男は飛び上がり、いくつもの白い刃物状の物体を化物に突き刺した
『ギ、ギィィヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ‼？』
化物は絶叫を上げ、消えていった
「なんだよ…不死身じゃなかったんかよつまんね」
男は興味が失せたかのように歩き出したが
ドス…ドスと、何体もの化物が出てきた
「おーおー、これはスゲェな。スゲェよ常識外だ。だけどな、お前らだけじゃねぇんだわ」
化物は男に手を伸ばす
だが
突如男の背中から六枚の翼が生やされた

男は六枚の翼を使い、化物を粉砕していく
「常識外のやつは俺だ、その俺から一言言っておくぜ化物」

「俺の『未元物質』に常識は通用しねぇ」
男――――垣根帝督はニヤリと笑った

垣根帝督の姿は月をバックにしていて、まるで天使のようだった

ヒーロー、雷神と会う

「ルキアと恋次はなんか一護のとこ行ってるし…何かあったんかな？」
　上条はソファで寝転がっている一方通行に聞いてみた
「知らねェ」
　だが一言で返されてしまった
「一言…」
「仮に何かあったとしても、俺はぶっ潰すだけだァ」
　もしも精霊邸に侵入したらの話だがなァ、と一方通行は付け加えた
「そうか……」
「それに、それは昨日の事だろ？もォ帰って来てンじゃねェのか？」
「いや、さっき浮竹さんとこに行ったけどまだ帰って来てないって」
「それか、ただの休暇で行ったとかじゃねェか？」
「……うーん、だけど浮竹さんは命令で行ったって言ってたけどな…」
　言っていく内にどんどん分からなくなっていく
　上条は頭を悩ませ、一方通行は寝る準備に入った

その時

『精霊邸に侵入者!!?・侵入者発見!!?・』

「!?・?」

上条はハッと顔を上げ、一方通行は素早く立ち上がった

「侵入者…!?・?」

「……そォらしいな。兎に角外に出るぞ」

上条と一方通行は現状を把握する為、外に出る事にした

「俺は上から見てくる」

一方通行は数十メートルジャンプし、周りを見た

(門が突破されている。ガラの悪い雑魚等が各地に配置されて、それを陣取ってる奴らがいる…)

一方通行は一目みただけで大体の事は分かっている

「一方通行!!?・」

上条は降りてきた一方通行に駆け寄った

「どォやら、敵は随分と準備していたよォだな。雑魚共を沢山引き連れていやがる。それを陣取っている奴ら…二人はいるな」
「!!?門は破られたのか!?」
「ああ、あのデブが伸びていたけらなァ。恐らくもう攻撃を開始して――――――」
『敵が瀞霊邸に攻撃をしかけたァァあああああ!!?』
一方通行の言葉を遮った情報
どうやら間に合わなかったようだ
わぁァァあああああ!!?と遠くから聞こえる
恐らく雑魚共と死神達が交戦しているのだろう
「一方通行!!?俺たちも行かないと…ッ!!?」
「……ここからじゃ面倒だァ。屋根を走る」
え?という上条の問いかけを無視して、上条の襟首を掴んで飛んだ
そしてスタッと綺麗に屋根に着地した
「こォ行った方が速いッ!!?」
「ちょちょちょ待てェェえええええ!!?」
一方通行と上条は交戦している場所に向かった

その時

「悪りぃが行かせねぇよ」

轟ッ‼?と、頭上から声と何かが聞こえ、振り落とされた

「⁉?」

一方通行はギリの所で避け、隣の屋根に移った。上条は何が起こった?といつ顔で立った

二人は前の屋根に注目する

もうもうと煙が晴れ、そこから一人の男が姿を現した

「ハロー上条ちゃんに一方通行。現世から遥々お前らを〝殺しに来たぜ〟」

一方通行と上条はその言葉を聞き、上条は右手を構え、一方通行は重身を前に倒した

「誰だお前は」

一方通行はギンッと男を睨んだ

だが男は怯えず

「俺か?俺は雷神トール。まぁ……グレムリンって名乗っとく」

「グレムリン…？」
上条はそんなの科学では聞いた事ない。そして真っ先にこれは魔術と判断した
恐らく一方通行も同じであろう
「まぁ、そんな事考えずにさぁ……やろうぜ？」
上条と一方通行が反応した時には
五本の〝何か〟が、二人を襲っていた

ヒーロー、雷神を知る

五本の何かは、上条と一方通行に真っ直ぐに降ろされる。

「ッぐー！」

「ッ」

上条は右手で受け止め、一方通行は素早く横へと飛んだ。

だが上条は右手以外の範囲を受け、左腕を掠る。

そこから『熱』を持ち、上条は左腕を抑えた。

（熱い…！なんだこれッ!?）

一方通行は切られた断面を見る。

五本の何かによって簡単に切られた建物の断面が赤く染まっていた。そこから熱気が溢れ出し、高熱を生み出す。

（〝熱〟…あのブレードは熱を持っているって事か。これは三下には不利かもなァ。だったら！）

一方通行はトールに突っ込む。

能力を発動させ、謎の人物トールに殴りかかる。
その合間に一方通行が叫ぶ。
「三下ァ！こいつはお前には無理だ！他の奴のとこに行ってこい！」
「ッ!?でも」
「こいつは俺一人で十分ッ、だァ！」
一方通行はトールを殴り飛ばす。
トールは屋根の上を飛び、徐々に降下して行って追突する。
それを一方通行は逃すまいと追いかけた。
「いっつー……凶暴しすぎるなぁ一方通行。家壊しちまったじゃねえか…」
トールは特に痛がりもせず、向かってくる一方通行に迎え撃った。
科学と魔術。
その差は歴然。
トールは空いている左手でまたブレードを創り出し、一方通行に振り下ろす。
「ッ！」
それを一方通行は反射で跳ね返し、トールにかかと落としを決めた。
トールは家へと突っ込み、木の藻屑を被る。
一方通行は壊れた屋根からトールに問いた。

「お前、魔術ってやつを使ってるのか」
「ハッ、魔術ねぇ。確かにそうだ。俺は魔術師だ。それが何か？」
「その魔術師が、俺たちに何の用がある」
「用って言われても、俺は〝経験値〟を得に来ただけだッ！」
トールは瞬時に起き上がり、一方通行の前まで瞬間移動したかのように並んだ。
一方通行は一瞬の事で対応が遅れ、トールの拳を真正面から受けてしまう。
だが吹き飛びはしなかった。一方通行は真正面に攻撃を受けるも、その場に留まった。
だが、
そこにはトールの追撃が待っている。
「このグローブは雷光の溶断ブレードでねぇ。最大で2キロは余裕だぜ？」
（溶断、ブレードッ！）
「焼き消せェッ！ミョルニル！」
そう叫んだトールは先程とは比べ物にならない程の溶断ブレードを噴き出した。
こんなもの、正面で受け止めたらひとたまりも無い。
だがそれよりも一方通行は気になっていた。
（……あ？おかしい。2キロにしちゃ小さすぎる）

そう、”短すぎるのだ”。
彼、トールならこの瀞霊廷の一角を吹き飛ばせる力をもつはず。自分の殺したいなら、それ相応のことをするはずだ。
他のものを巻き込んでも。
あのブレードは大体五十メートル。自分が舐められているか、それともーーーー。
巻き込みたくないか。に絞られる。
「ッ三下ァ！」
その考えに至った一方通行は上条を呼んだ。
何故この場にいない彼を呼んだのか。違う。
彼はここにいる。
「うおォォおおおおお！」
一方通行の背後から現れた上条は、トールが生み出した溶断ブレードに向かって右手を突き出す。
パキィイン！とガラスの音を響かせ、溶断ブレードは消え散った。
「ッ!?ぐっ！」
消えた反動で後ろに蹌踉めく。それを見逃さなかった一方通行は、トールの体を地面へと押し付けた。

押し倒す形になったが、一方通行はトールの首根っこを掴み、問う。
「何故この戦いに参加した。お前」
「……」
「俺たちを殺す気はないンだろォ？北欧神話の『雷神』さんよォ」
「……へぇ、気づいてたのか」
トールは笑い、一方通行を見据える。
一方通行は気づいていたのだ。彼が名を名乗った時から、勘付いていたのだ。
だから疑問だった。
北欧神話のトールは雷の神にして最強の戦神である。
数々の神を打ち殺し、人々を守る要と称されたトール。
だがその性格は穏やかとは言えない。乱暴で、時にはミョルニルで脅す傾向があると記されている。
そのトールとこのトールは同じなのだろうか。
いや、十中八九同じと言えるだろう。容姿は記されていたものと違っても、その乱暴さやミョルニルは北欧神話と同じ。
だから気に入らないのだ。
そのような性格なら、上条と一方通行を殺す為には手段を選ばない。と一方通行は

思っている。乱暴という性格がどのようなものかは人によって違うが、このトールは北欧神話のトールとは言い難かった。

脅すといっても脅す傾向など無いし、ミョルニルというハンマーもない。つまりこのトールはトールであってトールではない。

一方通行はその事を大半をトールに言った。

トールは薄く笑う。

「確かに俺は北欧神話のトールだ。だが同じとは考えない方がいいぜ？とは言っておく」

「……」

「俺の行動原理を教えてやろうか？一つ、力を求めること。もう一つは『助けられるやつは助けること』」

「……それと俺たちに何の関係がある」

「お前らの前に現れたのは、俺が全力で戦えるのに相応しかったから。主に上条ちゃんがな」

「俺？」

一方通行の背後にいた上条が驚きに声を上げる。

トールは特に振り払おうとはせず、彼らに揚々と次々と話していく。

「最強と言っても、最強じゃあ困る事があるんだよ。人の安全的な事がモットーの俺は、なるべく被害が出るのを避けたかったんだ。だが、俺が戦うだけで至る所が壊れ、人は皆、あっさりと死んでいく。俺はそれが避けたくてずっと戦うのを控えてた。だがな、強敵と戦ってもダメなんだ。特に一方通行みたいなやつはな」

「……」

「強敵と全力で戦うと周囲にいたやつも巻き込んじまう。それが後味悪くて、罪悪感を感じるから嫌なんだよなぁ。ま、上条ちゃんに目をつけたのは強ち間違いじゃなかったが」

「……なンで三下に目をつけた」

「幻想殺しは異能の力を消す能力なんだろう?それなら、俺は全力で戦える。幻想殺しが消して消して消しまくれば、周りの被害も抑えられるっていう寸法だ」

「……お前、本当に北欧神話のトールか?」

「だから言ったろ?伝記と一緒にしちゃダメだってな。まぁ、大体はその伝記の通りだ。というわけで…」

話を終えたトールは一方通行の腕を掴んだ。

「!?」

突然の事で反応が遅くなった一方通行は、徐々に強くなっていく力に苦痛による顔を

歪める。
　トールは先程とは違い、好戦的な笑みをしていた。
「俺も最強の戦神なんでねぇ…黙ってやられる訳には行かないんだよなぁッ！」
「ツガァ！」
　首を掴んでいた手を離し、一方通行を地面へと叩きつけた。
　人間とは比べ物にならない程の握力に、一方通行の身体は傷を作っていく。
「一方通行ッ!?」
「さぁて上条ちゃんよぉ、俺と一戦交えようじゃねえか！」
　拳を鳴らしたトールが上条と対峙する。
　もう彼の目には上条しか見ていなかった。
　確かに、一方通行は強い。だがトールは一方通行は相応しくない。
　トールは自分にとって相応しい相手と戦いたい。それが上条当麻なのだ。
　上条は自身の武器の右手を構え、トールと対峙する。
　最強の雷神と幻想殺し。

　両者の拳が交わった。